HOKUDAI
GENKI
PROJECT

北大元気プロジェクト 2012

実施報告書

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

目　次 CONTENTS

はじめに …… 3
北大元気プロジェクト2012選考委員会委員 …… 4
北大元気プロジェクト2012名称と目的 …… 5
臼尻・海の生き物図鑑 …… 8
え!?　新入生が展示解説!? …… 10
沿岸域を含む津軽海峡の海鳥モニタリングおよびその普及 …… 12
CLARK THEATER 2012 …… 14
子どもに勉強の習慣と自ら考える力を！～函館港町自習学館～ … 16
サタデースクールプロジェクト2012 …… 18
震災支援情報誌「OUEN TIMES」プロジェクト …… 20
大学の授業体験 with CAP …… 22
第7回北海道大学国際文化祭 …… 24
夏休み企画！ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO！ …… 26
北大健「口」プロジェクト2012 …… 28
北大金葉祭 …… 30
北大祭環境負荷軽減プロジェクト …… 32
北大生のみんな　留学生センター「日本語イブニングコース」で外国人に日本語を教えよう！！ …… 34
北大理科部～わくわく科学教室～ …… 36
僕らの歩行祭～夜のピクニック～ …… 38
北海道学生think tank …… 40
北海道大学入学式前夜祭2013 …… 42
北海道大学フォーミュラチーム …… 44
みんなの芸術祭実行委員会“Brio！” …… 46
ロボットフィールドプロデュース2012 …… 48
World Music Festival In Hokudai …… 50
北大カフェプロジェクト …… 52
よさこいナイトフィーバー2012 …… 55
北大生による「生物ロボットコンテスト」への参加 …… 56
北海道大学卒業パーティー2013 …… 59
「元気プロジェクト2012」活動報告会を開催 …… 60
北大元気プロジェクト2013募集中！ …… 61
北大元気プロジェクト2013募集要項 …… 62

はじめに

●北大元気プロジェクトとは

北大元気プロジェクトは、平成13年に「学生が持っている自主性、創造性を思う存分発揮できる機会を提供し、充実した学生生活を送れるようにしよう」と、学生の修学及び研究意欲を促進するため創設されました。北大の学生であれば誰でも応募でき、採択されると大学から活動に必要な物品支給（上限50万円）等の援助を受けられる本プロジェクトには、12年間で249件のプロジェクトが採択されています。

本冊子「北大元気プロジェクト2012実施報告書」では、採択された団体が、実際にどのような活動を行ったかを広く知ってもらうため、北大元気プロジェクト2012採択団体から提出された実施報告書をまとめました。

【参考　過去の応募・採択件数】

年度	応募件数（件）	採択件数（件）
13	32	14
14	28	24
15	29	21
16	28	16
17	18	17
18	21	13
19	27	17
20	43	26
21	42	25
22	43	25
23	47	25
24	45	26

●北大元気プロジェクト2012採択スケジュール

平成24年4月27日（金）	1回目募集締切
5月15日（火）、16日（水）	面接・選考委員会
6月29日（金）	2回目募集締切
7月17日（火）、18日（水）	面接・選考委員会

●北大元気プロジェクト2012選考委員会委員

平成24年4月1日現在

公共政策学教育部	教　授	辻　　康夫
総合科学院	教　授	坂口　和靖
薬学部	教　授	周東　　智
文学研究科	教　授	佐々木　啓
法学研究科	准教授	根本　尚徳
理学院	教　授	高岡　秀夫
生命科学院	教　授	山本興太朗
保健科学院	教　授	武田　直樹
工学院	教　授	成田　吉弘

●下記項目について、代表者に各プロジェクト終了後、5段階で評価してもらいました。

- **当初の目的を達成できた**
- **期待される成果・効果をあげられた**
- **自主性・創造性を発揮できる機会となった**
- **修学及び研究意欲を高めることができた**
- **今後の学生生活及び卒業・修了後に役立つ経験であった**

5：特にあてはまる

4：あてはまる

3：まああてはまる

2：あまりあてはまらない

1：まったくあてはまらない

No.	プロジェクトの名称	目的
1	臼尻・海の生き物図鑑	楽しく読みながらも知的好奇心を掻き立て、学術的要素も盛り込むことで専門家を満足させられる「海の生き物図鑑」を作成し、これを用いて小学校から中学校を主な対象とする科学教育を行うことを目的とする。
2	え!?　新入生が展示解説!?【継続】	総合博物館の常設展示について展示解説を行うことで、①学生が主体となって企画を作り、実施する姿を市民の皆様に見てもらうことで、北大生の行動力と積極性を知ってもらい、②展示解説を通し、自分の持っている知識や思考方法の異なる相手に対して、伝えたいことを性格に、分かりやすく伝えるという、コミュニケーションの重要な根幹を成す能力を伸ばすことを目的とする。
3	沿岸域を含む津軽海峡の 海鳥モニタリングおよびその普及【継続】	①沖合や沿岸域など広範囲で海洋生態系の調査をすることにより、津軽海峡および周辺における情報蓄積を充実させ、汎用性の高い有用なモニタリング体制の構築を目指す、②高校生などを対象とした普及教育活動も継続することを目的とする。
4	CLARK THEATER 2012【継続】	①映像文化の振興、②大学内の施設を有効活用した学生と市民との交流、③学生のキャリアアップを目的とする。
5	子どもに勉強の習慣と自ら考える力を！ ～函館港町自習学館～	子どもの「自学・自習」の学習力を内面から開発することを目的とし、教育に興味がある、または、教員を目指す大学生が地域の子どもたちの学習環境の整備をお手伝いする。
6	サタデースクールプロジェクト2012 【継続】	子どもたちの学習支援や遊び支援を中心として活動することで、①安全で快適な学びと育ちの空間を作り出す、②小中学生、保護者、地域住民、学生が交流を深められる異年齢コミュニティを創出する、③若者、青年に豊かな経験を提供することを目的とする。
7	震災支援情報誌「OUEN TIMES」 プロジェクト	長期にわたって必要とされる震災復興に携わってもらう機会を提供するため、震災支援についての正しく具体的な情報を広く提供することを目的とする。
8	大学の授業体験 with CAP	以下の3つの目標をたて、障害のある高校生等を対象に「大学の授業体験」を企画し、参加を呼びかけ、できる限りの支援をし、大学に興味を持ってもらい、今後の支援に役立てることを目的とする。 ①障がいのある方々への支援の輪を広げること、②障がいのある方々を受け入れていくための支援体制を持続可能で恒常的なシステムとして確立すること、③この取り組みを広く知ってもらうこと。
9	第7回北海道大学国際文化祭	北海道大学の留学生、日本人学生と札幌市民がふれあう機会を作ることを目的とし、北海道大学留学生協議会主催で国際文化祭を開催する。
10	夏休み企画！ニンテンドーDSを持って 北大博物館へGO！	携帯型ゲーム機「ニンテンドーDSi」のソフト「じぶんでつくるニンテンドーDSガイド」を用いて、博物館の展示解説を行う音声ガイドの作成及び配信を行うことで、小学生及びその保護者の北大博物館への関心を引き、来館を促し、さらに展示物への理解を深めてもらうことを目的とする。
11	北大健「口」プロジェクト2012【継続】	『こどもの健「口」プロジェクト』の成果を踏まえ、小児のみならず、成人・高齢者の口腔の健康の維持、増進を図るために、地域の現場で口腔保健活動を実施し、さらなる地域への貢献を目指す。
12	北大金葉祭	北大の景観を楽しみに来た観光客や市民が、景観をさらに魅力的に感じてもらうこと、北大生と交流を行うことで、北大にさらに親近感を持ち、好きになってもらうことを目的とする。

No.	プロジェクトの名称	目的
13	**北大祭環境負荷軽減プロジェクト【継続】**	北大祭の模擬店で使用する容器を環境に配慮したものにすることで、環境負荷の軽減を図る。
14	**北大生のみんな 留学生センター「日本語イブニングコース」で 外国人に日本語を教えよう!!**	国際交流や留学、日本語教育に興味を持つ北大生が「日本語イブニングコース」で教壇に立つ支援を行うことで、北大生の①国際交流への興味・自信の喚起、②コミュニケーション能力の向上、③異文化理解の向上を図る。
15	**北大理科部～わくわく科学教室～【継続】**	理科実験を通して、①身近に潜む不思議な科学を中高生に体験・理解してもらうことで、科学の面白さ・必要性を実感してもらう、②自分達自身も主体性・実行力・計画力・発信力等の社会人基礎力を身に付けて成長することを目的とする。
16	**僕らの歩行祭～夜のピクニック～**	80kmの距離を2日間かけて北海道の学生100人で歩き、各々の夢や目標あるいは日常の自分を語り合い、新たな日々へのきっかけを見つける場を提供する。
17	**北海道学生think tank**	学生間に本来あるべき“議論”する場を設けること、北大内外の学生との幅広い交流を目的とする。
18	**北海道大学入学式前夜祭2013【継続】**	①新入生同士の交流を深める、②大学生活に対する不安を取り除き、期待や希望を持ってもらう、③サークル発表などを通して、先輩の様子を見たり、交流をすることを目的としている。
19	**北海道大学フォーミュラチーム【継続】**	「全日本学生フォーミュラー大会」へ参加し、企画から設計・製作に至るまでの「ものづくり」を体験することを通し、その本質やプロセスを学ぶとともに、創造力や実践力を養うことで、社会に出ても通用する人材になることを目指す。
20	**みんなの芸術祭実行委員会“Brio!” 【継続】**	体験コーナーを設けた芸術祭を開催することで、気軽に芸術作品を鑑賞および体験することができ、プロアマ問わずに発表の機会を望んでいる人が作品を展示することのできる場をつくることで、芸術をより身近に楽しめる環境を作ることを目的とする。
21	**ロボットフィールドプロデュース2012 【継続】**	小学校低学年向け、中・高学年向け、中学生以上向けのロボット教室を行うことで、ロボットという存在が自らの力で創作可能だという達成感を知ってもらい、それを通してものづくりに対する興味関心を喚起することを目的とする。
22	**World Music Festival In Hokudai**	言語の壁を超えて、音楽という文化を一緒に楽しむことを軸に、北大の留学生と日本人学生を中心としてコンサートを開催。北海道大学を両者のより活発な交流が行われる様なキャンパスにすることを目的とする。
23	**北大カフェプロジェクト【継続】**	「人と人を繋ぐこと」を目的とし、北大構内および札幌市都市部を中心に、コミュニケーションスペースとしてのカフェを、設置場所をイベントごとに変えながら展開する。
24	**よさこいナイトフィーバー2012【継続】**	①北大祭の初日の夜にみんなで踊って楽しむことで、北大祭全体を通して楽しい雰囲気を作る、②留学生と日本人学生の交流を生むことを目的とする。
25	**北大生による 「生物ロボットコンテスト」への参加 【継続】**	世界各国の大学生チームが、規格化された遺伝子パーツを組み合わせて作成した、遺伝子組み換え生物の性能と有用性を競い合う「生物ロボットコンテスト」（iGEM）に参加することで、研究活動をするうえで必要な実験技術やマネジメント法、国際交流を通じた英語によるグローバルな発表方法を学部生という早期段階で習得することを目的とする。
26	**北海道大学卒業パーティー2013**	歓談、立食パーティを開催することにより、卒業生と同窓生あるいは卒業生同士の絆を深めること、また卒業生に新たな交流の場を提供し、北海道大学の良き思い出の1つにしてもらうことを目的とする。

北大
元気プロジェクト
2012
実施報告書

臼尻・海の生き物図鑑

代表／山崎　彩　　環境科学院　　生物圏科学専攻　　修士2年

実施の内容

本プロジェクトでは、臼尻（函館市）に生息する海洋生物を対象とした図鑑を製作し、これを用いて海洋の科学教育を行うことを目的とした。

図鑑は、本プロジェクト構成員が所属する臼尻水産実験所のホームページに掲載されている生物種に、新しく写真を撮影することのできた複数種を追加し、計200種の海生生物を掲載対象とした。この図鑑は全てカラー写真、全56ページで構成される。完成した図鑑は、当実験所ホームページ、北海道新聞、ダイビングショップを通じて宣伝し、希望者に配布した。また、当実験所において行われた実習では、フィールドへ出る前に図鑑を配布し、予備知識の蓄積として活用した（中高生向け：ひらめき☆ときめきサイエンス、学部1年生:フレッシュマン実習、学部2年生:野外実習アラカルト、学部3年生：臨海実習）。

実施時期

図鑑考案：～7月下旬

図鑑印刷・製本：7月下旬～8月2日

配布期間：8月4日～11月下旬

実施の評価

図鑑の配布については、函館市民からの配布希望が多く寄せられ、その年齢層は子供からお年寄りまで幅広かった。図鑑は11月で全て配布が完了し、その内訳は、実習：150部、研究機関：200部、一般：250部であった。さらに、この図鑑を販売したいとの依頼も受けることができた（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務より。来年度エルムの森ショップで販売予定）。

また、北大のみならず、他大学の研究者からの高い評価を得ることができ、他研究所においてもこのような図鑑を作成する動きを促進できた。これにより、今後研究者同士のつながりを作ることにも大きく貢献した。

また、実習前に本図鑑に目を通してもらうことにより、前年度よりも意欲的に取り組む学生が多く見られ、より深く学習することに貢献することができた。図鑑を作成した私たち学生にとっても、水中に隠れている生き物を探し出しそれらの種同定を行った・生態を調べたことは、海洋生物全般を一から学びなおす良い機会であったと感じた。

学生、一般市民、研究者だけでなく、臼尻の海に潜りに訪れるダイバーにも、ダイビングショップ「グラントスカルピン」を通じて本図鑑を配布させてもらった。素晴らしい水中写真を撮るダイバーたちに本図鑑を配布することで、北海道の海を理解してもらうとともに、北の海の良さを口コミ、ネットを通じて日本中に広めてもらうことができた。また、多くのダイバーが訪れたことは、学生の研究対象種に関する知識を得ることができただけでなく、地元に対する経済効果にも多く貢献することができたと考える。

しかしながらその一方で、図鑑の制作部数が予定部数よりも大幅に減少してしまったため、地域の子供全員を対象に配布することができなかった。また、実習以外の場における科学教育を行うことができなかった。今後、改訂版を作成する時は、実験所近くの小学生を対象とした寺子屋と協力し、磯観察等の科学教育を行いたいと考える。

構成員

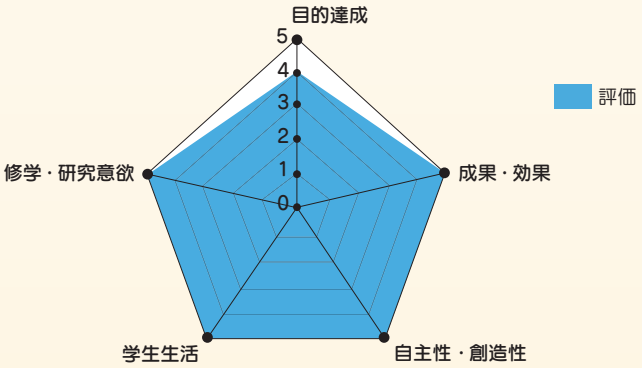
氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
入江雄一朗	環境科学院	生物圏科学専攻	1
大島　由貴	環境科学院	生物圏科学専攻	1
風間　香澄	環境科学院	生物圏科学専攻	1
鈴木　将太	環境科学院	生物圏科学専攻	1

臼尻 海の生き物図鑑

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
臼尻水産実験所

Usujiri Fisheries Station, Field Science Center for Northern Biosphere,
Hokkaido University

■実施評価



え!?　新入生が展示解説!?

代表／久保田　彩　　理学部　　地球科学科　　3年

■実施の内容

1. 実施内容

学部1年生に北大総合博物館の常設展示を来館者の前で展示解説してもらう。

2. 実施時期

6月　総合博物館教職員会議で了承を得る
7月　北大元気プロジェクト2012　採択決定
9月　解説員の募集開始（ポスター掲示）
10月　札幌芸術の森訪問（研修）、新入生の解説テーマ決定
11月　北海道開拓記念館･開拓の村訪問（研修）､解説テーマについて調査
12月　解説内容をミーティングにて検討
1月　シナリオ作成、イベント紹介のリーフレット作成
2月　リハーサル（解説練習）、イベント告知、第1回解説企画本番実施、アンケートを基に反省会
3月　第2回､第3回解説企画実施（予定）､反省会（予定）

3. 目的

今年度は、以下のことを主な目的として企画を実施した。
①解説の質の向上
②2年生（昨年度の新入生解説員）からの指導
③構成員の企画運営力の向上
以下、これらの目的に絞って企画を評価する。

■実施時期

2012年5月：北大元気プロジェクト応募準備開始
2012年7月：採択
2013年2月16日に展示解説企画第1回開催。また､3月2日､17日も開催予定。

■実施の評価

①解説の質の向上について

この目的の達成の為、学外施設での研修として、札幌芸術の森と、北海道開拓記念館・開拓の村にて解説研修を実施した。両施設では、実際に解説を聞いて来館者の立場に立つと共に、展示解説をする上でのノウハウについて、学芸員の方や展示解説ボランティアの方からご教授頂き、大変有意義な時間となった。また、当初予定していた話し方教室での研修は、途中で教室との連絡がつかなくなった為断念した。その代り、昨年、イベント告知ポスターの効果があまり見込めなかったことを教訓に、今年度はイベント紹介のリーフレットを作成した。（添付資料）リーフレットを選んだ理由は、ポスターと違い、持ち帰ることが可能であり、掲載できる情報量が多い為である。その他、解説シナリオ作成前のミーティングや、解説する姿のビデオチェックを通して博物館の教員の方の指導を受けることができた。2月16日に行われた第1回解説企画では、来館者の方にアンケートを取り、改善点と客観的な目で解説を評価する指標を集めることができた。

※北海道開拓記念館の方には解説研修でお世話になっただけでなく、パンフレットの一部を置くことを了承していただいた。

②2年生（昨年度の新入生解説員）からの指導について

2年生（昨年度の新入生解説員）は、大学祭や道新ぶんぶんクラブ共催講座、北海道大学ホームカミングデー2012で展示解説を披露するなど、今年度も活躍している。新入生はこれらの解説を見て学生の展示解説の様子を知ることができた。またシナリオ作成前の解説内容の検討会や解説本番前のリハーサルで、昨年の経験を生かして新入生を指導することができた。

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
中井　淑恵	理学部	地球科学科	3
太田　　晶	理学部	地球惑星科学科	2
川原　聡史	薬学部	薬科学科	2
小向　　愛	農学部	森林科学科	2
若狭　玲那	理学部	物理学科	2
中原　隆史	水産学部	海洋生物科学科	2

③構成員の企画運営力の向上について

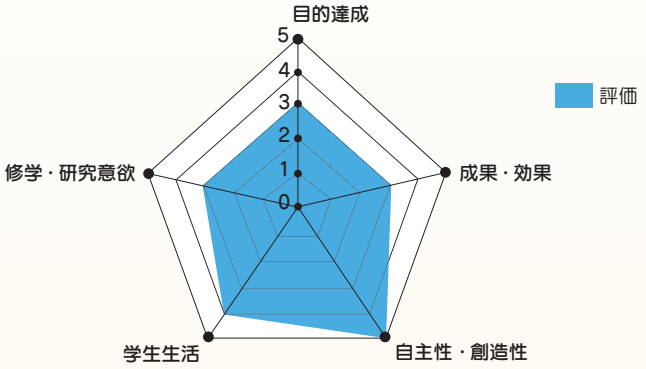
リーフレットの作成や、学外の美術館・博物館での研修のセッティングを通して、事前の打ち合わせの重要性や、懇意にして頂いた方への礼節を学ぶことができた。これらの経験は今後の学生生活や社会生活で大変役に立つと考えられる。ただし運営については反省すべき点も多かったので、下の項目で述べる。

■その他（希望・反省等）

企画運営の点で、1、2月のシナリオ作成や、専門の教員の方にシナリオ内容の添削を依頼する際に手間取り、第1回の企画本番での解説が予定されていたにも関わらず実現できなかった新入生が2名出た。これは運営が余裕を持った行動を計画できなかったことと、新入生全員の意識の高さを保つことができなかったことによると考える（シナリオ作成は新入生本人の自主性によるところが大きかった）。また、構成員同士の連携が上手く取れずに、分担するべき仕事を振りわけられず、効率が下がってしまった。

【謝辞】本企画の実施にあたって、多岐にわたり御協力・御指導をいただいた北大総合博物館の皆様、研修に快く応じてくださった北海道開拓記念館・開拓の村の皆様、札幌芸術の森の皆様に心より御礼申し上げます。また、本企画に展示解説員として参加してくださった7名の学部1年生、阿部光子さん、岸百合子さん、北野翔一君、熊澤広輝君、雲中慧君、芝池和孝君、福家智大君に感謝の意を表します。

■実施評価



沿岸域を含む津軽海峡の海鳥モニタリングおよびその普及

代表／平田　和彦　　水産科学院　　海洋生物資源科学専攻　　博士2年

実施の内容

毎月1回以上の頻度で通年、北海道沿岸域および津軽海峡（函館―大間航路）で定点もしくは定線上の鳥類を観察し、その季節消長を記録した。

昨年度までに継続して実施してきた洋上調査だけでは把握できなかった沿岸域におけるコクガン等の希少種を含む鳥類の利用環境や、それらが飛来する季節に関する情報を得た。沿岸域でしばしば発生する油流出事故などの際には、岩礁域、砂浜域、その他海岸の種を問わず沿岸環境が汚染される。鳥類はその影響を最も被りやすい海洋生物の一つである。本プロジェクトによって得られたデータは、有事にその被害が及びやすい種を推定したり、重点的に被害対策を実施すべきエリアの選定に役立つであろう。

とりわけ、冬季には青森県を含む津軽海峡および周辺海域の海岸線を網羅的に調査し、コクガンの越冬個体数とその生息環境について情報を集めた。コクガンはその亜種の相当割合が津軽海峡および周辺海域で越冬すると言われているが、具体的な個体数や生息域が網羅的に把握されたのは、本プロジェクトによる調査が初めてである。

また、2013年1月には函館湾内で青函フェリーから油が流出する事故が発生した。このとき、函館湾内の鳥類を網羅的に観察し、種ごとの個体数を記録し、被害状況を把握した。また、北斗市七重浜の砂浜海岸では、函館水産高等学校の生徒、教員とともに油や死体の漂着状況を記録し、油瀑個体を探索した。同時に、海洋環境汚染やそれに関する調査手法の普及、啓発に努めた。

実施時期

通年。沿岸調査、航路調査は毎月1回以上。
青森県側の沿岸調査は年2回（夏冬）。

実施の評価

沿岸域を含む津軽海峡の海鳥モニタリングという観点からは、高い達成度を得られたと考えられる。定点観察により定量的に海鳥の種構成、個体数およびその季節変化を捉えることができ、油流出事故等の有事に役立つデータを得るという目的に、十分に応える活動であったと自負している。

コクガンの越冬個体数と生息環境の把握に関しては、特に力を入れて取り組んだ。北里大学獣医学部や弘前大学の学生やOBとも連携し、津軽海峡を挟んだ北海道と青森県の沿岸線を広く網羅的に調査できた意義は大きい。可及的早く、データを整理して論文化することで、本プロジェクトで得られた成果を実際にコクガンおよび沿岸生態系の保全に役立てられるようにすることが重要である。しかし、今年度中にその段階まで達成することができなかった。本

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
堀本　高矩	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	博士1
戸梶　裕樹	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士2
日下部有紀	環境科学院	生物圏科学専攻	修士2
平川あざみ	水産科学院	応用生命資源科学専攻	修士2
鈴木　優也	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士2
久保　徹郎	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士2
山下　愛	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士1
先崎　理之	農学院	環境資源学専攻	修士1
保科　賢司	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士1
枷場ゆかり	水産学部	海洋生物科学科	4
上條明日菜	水産学部	海洋生物科学科	4
加藤　巧	水産学部	増殖生命科学科	4
太田　直紀	水産学部	海洋資源科学科	4
志村　遥	水産学部	海洋生物科学科	4
赤松　澪	水産学部	海洋資源科学科	4
伊藤　香澄	水産学部	増殖生命科学科	4
長谷　美佳	水産学部	増殖生命科学科	4
有馬　大地	水産学部	海洋生物科学科	4
長野　晃輔	水産学部	海洋生物科学科	4
君島　裕介	水産学部	海洋生物科学科	3
小原　章裕	水産学部	資源機能科学科	3
山木　悠也	水産学部	増殖生命科学科	3
三宅　翔太	水産学部	海洋生物科学科	3
吉川　絵里	水産学部	海洋生物科学科	3

プロジェクトは3月末をもって終了するが、その後もしっかりアウトプットするところまで持って行く所存である。

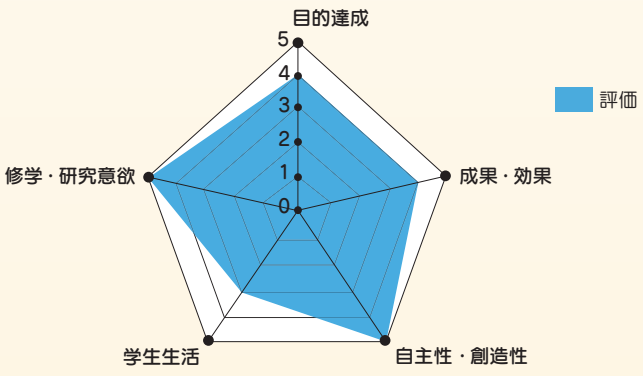
一方で、その調査手法や海洋環境への意識の普及・啓発という観点からは、十分な活動ができなかったと思われる。実際に、昨年度までに行ってきたような学校（過去に函館水産高等学校で指導を行った）での授業や課外活動を企画し、生徒や教員に直接指導する機会を作ることができなかった。

しかしながら、2013年1月に実際に油流出事故が発生した際に、過去の指導実績も踏まえ、函館水産高等学校の生徒、教員と協力して調査体制を敷けたことに関しては、高く評価できると思われる。これまでの活動が決して無駄なものではなく、今回もすぐに活動できる体制を整えていたことには十分な意義があると考えられた。

■その他（希望・反省等）

北里大学と弘前大学との共同で沿岸調査を行った際、一部のガソリン代を彼らが負担する必要があった。プロジェクトの主旨に合致した活用法であるにもかかわらず、北大生が運転もしくは同乗した区間にしかガソリンカードを利用できないというのは、いささか不便さを感じた。

■実施評価



CLARK THEATER 2012

代表／岩本　佳保里　　理学部　　数学科　　3年

実施の内容

今年は「Routes」というテーマを掲げて5日間のCLARK THEATER 2012を開催しました。上映プログラム数は34作品、20プログラムであり、うち企画プログラムはオープニング上映とクロージング上映を含めて5本ありました。全体のスケジュールはおおむね企画書通りで進みましたが、学内外広報活動が予定より遅れました。オープニング上映とクロージング上映以外の3本の企画は「『しあわせのパン』上映会＆三島有紀子監督トークショー」、「『茹田蟹幸ライジング』上映会＆監督・主演トークショー」、「3.11＋596～さて、明日のぼくらは？～」というものでした。

「しあわせのパン」上映会では、北海道を舞台にした作品の上映と、本作が長編映画デビューとなった三島有紀子監督のトークショーを行いました。お客さまからは「愛とは何か」という質問があるなど、終始和やかな雰囲気で行われました。「茹田蟹幸ライジング」上映会では、普段あまり観ることのないアニメと実写の融合映画を上映し、梶野竜太郎監督と主演の初原千絵さんの息の合った楽しいトークショーを行いました。また、「3.11＋596～さて、明日のぼくらは？～」では、2011年に起こった東日本大震災の現場で撮影された2本のドキュメンタリー映画の上映、並びに現場で活動していたスコップ団団長の平子さんと環境省北海道環境パートナーシップオフィスから有坂美紀さんをお呼びしてトークショーを行いました。

実施時期

2012年10月24日（水）～28日（日）

実施の評価

前年度から比べて入場者数が1000人減りました。これは広報や宣伝の出遅れが大きな原因の一つと考えられます。一方で、スタッフや運営の質が大幅に向上しました。講習会を行うなどしてスタッフの対応向上を行い、しっかりと準備をしたので運営ミスも減りました。目標のひとつであった質の向上が達成されたと思います。

今年、ローカルラジオへの出演が増えたり、新たにWEBでの告知をしていただくなど、プレスリリースが増加し、さまざまな宣伝が出来ました。ローカルラジオや新聞の地域欄で宣伝出来たことで、札幌の一般市民の方々により知っていただき、北大の魅力を伝えるきっかけになったのではないかと思います。

また、チームで協働することで、CLARK THEATER含め、企画などの大小さまざまなプロジェクトを成功させることが出来ました。1年目から企画の中心に入り、責任あるタスクを受け持つことで役割を得て成長することが出来たと思います。

今回のCLARK THEATERで得られた経験は、人との接し方やお客さまへの対応の仕方、企画発案、プロジェクト進行、当日運営など多岐に渡ります。それらすべてが、今後メンバーが活動して行く中で、必ず活かされていくはずです。

その他（希望・反省等）

前年度から比べて入場者数が減ったこともあり、集客を考える必要が有ります。その一方で、ただ人を集めるだけではなく、何をどのように発信して行くのか、学生の自分たちが出来ることは何なのかを考えていかなければなりません。また、今年達成出来た質の維持はもちろんのこと、増加しているメンバーひとりひとりが活躍出来る場所をつくっていくことも大切だと考えます。さらには、もっと他の団体とも協力して何か出来ればと考えています。

CLARK THEATER 2012 事業終了収支報告書

2012年11月1日

―収入―

項目	金額（円）
北大元気プロジェクト	500,000
協賛金	743,475
入場料収入	624,748
計	1,868,223

―支出―

項目	金額（円）
上映権取得費用	345,049
広告宣伝費	376,360
機材レンタル費	420,000
イベント経費	534,069
雑費	145,348
装飾費	19,842
ゲスト費	18,634
寄付金	5,400
計	1,864,702

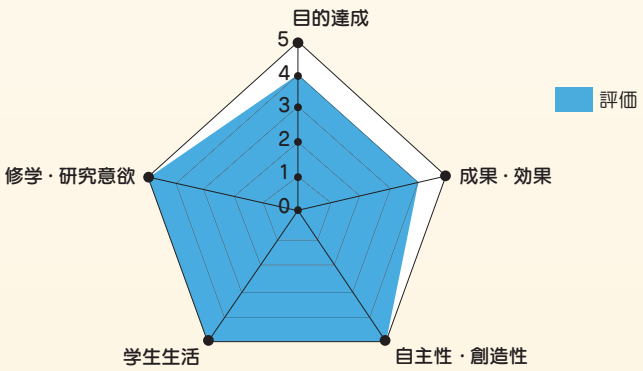
収支合計	3,521

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
濱田　菜歩	水産学部	資源機能化学科	2
増子　瑞恵	法学部	法学課程	2
長谷川知輝	工学部	情報エレクトロニクス学科	3
井村　洋介	教育学部	教育学科	3
久米　駿介	農学部	生物機能科学科	3
関　　直哉	薬学部	薬科学科	2
山口　竜馬	理学部	地球惑星学科	3
渡邉　祥矩	農学部	農業経営学科	2
大川　友香	（北海学園大学）		4
小林　一敦	法学部	法学課程	4
濵口　涼子	文学部	人文科学科	4
眞野　修一	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
丸田　拓哉	経済学部	経営学科	4
三橋　千明	文学部	人文科学科	4
大内　奏太	経済学部	経済学科	2
木藤　瑛子	文学部	人文科学科	2
鈴木　悠介	法学部	法学課程	2
石川　瑞羽	（東海大学）		1
梶　　智博	総合教育部理系		1
小林　素直	総合教育部理系		1
駒林　友香	（藤女子大学）		1
佐々木優希	総合教育部理系		1
高山美里香	総合教育部文系		1
鳥居　俊作	総合教育部理系		1
中島　美緒	（藤女子大学）		1
飯田百合子	農学部	森林科学科	4

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
沼達　千遥	文学部	人文科学科	4
坂内　俊暁	工学部	環境社会工学科	4
今　拓久真	法学部	法学課程	3
川田麻菜美	法学部	法学課程	3
善徳　勇貴	歯学部	歯学科	2
谷口　桃子	経済学部	経営学科	2
根岸　洸人	経済学部	経済学科	2
福田　千晶	医学部	保健学科	2
北原　卓弥	総合教育部理系		1
古田　千紘	教育学部		1
前重　　光	総合教育部文系		1
石塚　規行	工学部	環境社会工学科	4
石本　梨沙	法学部	法学課程	4
奥　奈美香	（藤女子大学）		4
田中　正樹	経済学部	経営学科	4
根上慎一朗	理学部	物理学科	4
山崎友樹子	文学部	人文科学科	4
尾張　雄太	理学部	地球惑星科学科	2
篠原　優佳	（藤女子大学）		2
土山　　啓	医学部	保健学科	2
羽二生彩佳	（藤女子大学）		2
相原　雄也	工学部		1
髙橋みづき	総合教育部文系		1
茶谷　果倫	（東海大学）		1
宗像のぞみ	文学部		1
北村　沙織	経済学部		1
桝谷亜美子	総合教育部理系		1
五十嵐千人	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
切明　研人	工学部	応用理工系学科	4
佐々木大輔	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
島畑　裕也	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
鈴木　雅大	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
藤原　圭史	工学部	応用理工系学科	4
成田友里恵	文学部	人文科学科	2
堀　ゆりえ	経済学部	経営学科	2
伊東　茉優	（藤女子大学）		1
岡本　知之	総合教育部理系		1
笠原　志穂	（藤女子大学）		1
佐藤　俊英	（東海大学）		1
廣川依寿美	（東海大学）		1
森田　　恵	総合教育部理系		1
平木　隆浩	大学院	情報科学研究科	修士1
中村　一成	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
鳴海　佳苗	（藤女子大学）		4
松下　春花	（藤女子大学）		2
金石　瑞季	文学部		1
半澤　麻衣	文学部		1
竹内　俊一	工学部	環境社会工学科	3
浅野　輝一	理学部	化学科	2
大嵜　勝元	工学部	情報エレクトロニクス学科	2

実施評価



子どもに勉強の習慣と自ら考える力を！
～函館港町自習学館～

代表／村松　康太　　水産科学院　　海洋生物資源科学専攻　　修士課程2年

■実施の内容

・漢字と算数ドリルの導入

⇒目的に挙げていた常に子ども達の勉強への意欲に応えられるようには、各学年のドリルを利用する事に応えられていたと思います。

しかし、あくまで副教材として我々は活用を考えていたものを、子ども達が、自分の教材を持ってくるルールを破り、副教材に頼り過ぎる場面が見られることが多々ありました。そのため、子ども達への徹底だけでなく、会報や便りを通して、親への周知も行うことも行っていくつもりです。

・辞書の導入

⇒漢字や英語の語句に関する質問に、ただ応えるだけでなく、知識の定着のために自分で調べてもらうために導入しました。その結果、積極的に辞書を活用し、自分の疑問に対応する生徒が大きく増えました。しかし、辞書が足りなくなるという問題も発生しました。来年度は、辞書のストックを増やし、さらに、使ったら戻すという事を徹底し、子ども達の要求に対応するつもりです。

・ストップウォッチの導入

⇒百マス計算の導入に対して、一括して時間管理が出来るストップウォッチを導入しました。毎回、勉強への集中力が切れた頃に行うことで、集中力の維持に努めました。しかし、やりたい子やりたくない子、やる気のある子ない子など、取り組む姿勢に子ども達の中で差があり、そこを解決することが非常に大事であり、課題であると考えています。

■実施時期

平成23年11月4日から、現在（平成25年2月）まで継続して行っている。

活動日は毎週金曜日17時から19時。

低学年は17時から18時。高学年及び中学生は17時から19時。

■実施の評価

日々子ども達の成長を感じる事が出来ます。それは、勉強面だけでなく、子ども達の社会性にもみられます。挨拶、お礼、先生への質問など、あらゆる場面での礼儀というのも、勉強と同時に子ども達に徹底させています。このことを継続した結果、親御さんや地域の町会員の方々から、勉強に集中する時間が増えただとか、挨拶をするようになったという声も多く頂いています。

一年間継続してこの教育ボランティアを行った結果、本スタッフ2名が来年度から県立の高校教員として働くことが決まりました。さらに、この継続的な取り組みが評価され、函館新聞に本活動に関する内容が3回掲載され、活動当初6名だった子どもの数も、今では43名になりました。さらにスタッフも4名だったのが、20名になり、多くのスタッフで子ども達の多様な要求に応えられる体制を整えています。また函館市の児童福祉課の職員や、他の町内会にも本活動が評価され、多くの方々が視察に訪れ、今年の1

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
横地　恵一	水産科学院	海洋応用生命科学専攻	修士2
和泉　裕志	水産科学院	海洋応用生命科学専攻	修士2
井上　翔一	水産科学院	海洋生物資源科学専攻	修士2
中村　基記	水産科学院	海洋応用生命科学専攻	修士2
佐藤　一道	水産科学院	海洋応用生命科学専攻	修士1
猪原悠一郎	水産科学院	海洋応用生命科学専攻	修士1
長谷　美佳	水産学部	増殖生命科学科	3
赤松　　澪	水産学部	海洋資源科学科	3
渋谷　泰輝	水産学部	海洋生物化学科	3
バーザー海渡	水産学部	海洋生物化学科	3

月には函館市万代町で、北海道教育大学函館校の学生を中心とした新たな自習学館が作られ、市全体の地域教育として本自習学館の活動が認知されてきています。

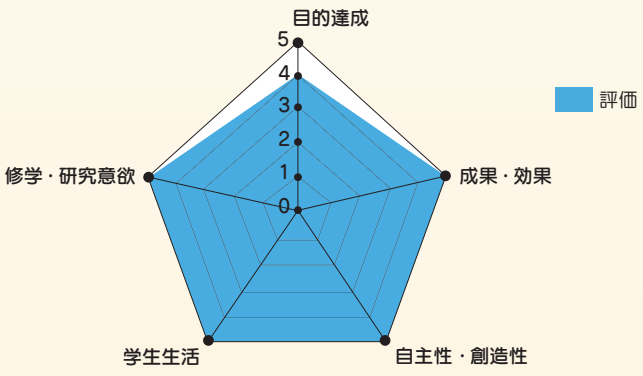
現在は、様々な人々と接することが出来るこの場を継続し、今まで以上に子ども達や私達自身が、共に成長できる場となるように活動しています。

その他（希望・反省等）

来年だけでなく、長い年月継続してこの函館港町自習学館を行いたいです。

地域の子ども達や、地域住民、更には函館市を巻き込んで、地域教育の在り方を多くの方々に示せれば良いなと思っています。

実施評価



サタデースクールプロジェクト2012

代表／水野　愛海　　教育学部　　教育学科　　3年

実施の内容

本活動は、毎週土曜日、札幌市アカシア若者活動センター（以下アカシア）にて実施した。活動時間は13時から16時までであり、準備、後片付け及び反省会などを活動前後に行った。

本活動には通常活動と特別活動がある。まず、「通常活動」は、「遊びの時間」と「学習の時間」の二部構成になっている。「遊びの時間」では、世界地図パズル、カプラ、剣玉などで遊び、アカシアの体育室でボートボールなどを行った。また時には近くの公園に出かけ、シャボン玉飛ばしやサッカーをした。ボランティアは子どもの遊びのリクエストに応えたり、「一緒にトランプやろうよ」と提案したりした。「学習の時間」では、子どもたちは自分で学習目標を立て、家庭から各自持参したワークや宿題などに取り組んだ。ボランティアは子どもたち一人ひとりに合わせて、問題の考え方を教えるなどといったサポートをした。

次に「特別活動」はボランティアがアイディアを出し合って企画し、実施した活動である。子どもたちが様々なことを体験しながら学び、楽しめるような内容を目指した。今年度は、毎年恒例となっている北大祭巡りや流しそうめん、クリスマス会などの他に青少年科学館見学やハロウィンパーティーなどを行った。またアカシアと協力して、「もちつき交流会」を実施した。これは、サタスクに参加している子どもたちだけではなく、地域の子どもや大人も対象にした。もちつきの他にもよさこいを演舞した「縁」など他団体との交流を図り、親交を深めることができたと思う。

子どもたちには毎回、ノートに学習の目標や活動全体の感想を書いてもらった。ボランティアもその日の子どもの様子を記入することで保護者に活動中の様子を伝え、保護者からもコメントを記入してもらった。このノートや活動前後の保護者との会話を通して、それぞれの子どもたちへの理解を深めるようにしてきた。

毎回の活動後には反省会を行い、その日の子どもたちの様子や子どもたちと関わって感じた点などをボランティア間で共有した。そこで出された疑問や問題を解消し、その後の活動に活かすようにした。また、反省会の内容については、メーリングリストを利用して、その日の活動に参加していないボランティアも共有できるようにした。さらに今年度から反省会で出た意見を再確認するために反省会ノートをとるようにした。このノートを活用することで、ある問題に対してどのように対処したのか、を把握し活動へのフィードバックを促進しようとした。反省点を意識して活動するために、毎週の活動前には前の週の反省点を確認するミーティングを欠かさず行っている。

実施時期

2012年4月7日（土）から2013年3月16日（土）
毎週土曜日に実施

実施の評価

サタスクの活動を通じて、私たちが達成しようとした目的は3点ある。

1点目は「異年齢コミュニティの創出」である。現在サタスクには小学一年生から中学二年生の子どもたちが参加している。近年少子高齢化に伴う地域コミュニティの縮小により、様々な年齢の集合体であるサタスクのような場は、失われつつある。学校では同じ学年の子ども同士の付き合いに限定されてしまうが、サタスクは普段出会うことのない子ども同士が交流する機会を創出している。

そのような状況下で、通常活動、特別活動ともに全体でレクリエーションを行うなどして、ボランティアを含め参加者間で親交が深められるようにした。その結果、性別、学年関係なく自然に会話が生まれ、共同作業を楽しんでいた。しかし、子ども同士が時に喧嘩をしたりして、関係性が悪くなることもあった。仲良く遊べるような雰囲気作りとともに、ボランティアが間に入ってお互いの気持ちを理解できるよう諭すことも必要である。

2点目は「子どもたちの成長」である。初めてサタスクの活動に参加した時は、ボランティアに対して人見知りをしていた子どもが、継続的に参加することで自分から学校であった出来事を話してくれるようになった。これはボランティアが活動時間に対話を続けて、信頼関係を育めた結果だろう。さらに、特別活動でお菓子を作った際、高学年の子どもが、低学年の子どものためにお茶を運んで、お皿を用意するなど配慮する場面が見受けられた。また特別活動では、一つの物を皆で作り上げる作業を入れるように意識した。そのことによって、子ども同士で作業を交代で行ったり、道具を順番に使ったりするなど「譲り合うこと」を学ぶことができたと考えられる。

3点目は「ボランティア自身の成長」である。ボランティア自身もサタスクの活動を通じて学ぶことがたくさんあった。時には子どもへの対応に悩むこともあるが、試行錯誤しながらも子どもたちの成長を見ることができ、喜びややりがいを感じている。このような経験は大学では得られないものであり、視野を広げることができた。

広報活動に関する評価

昨年度の課題点として、子どもの参加人数の低下が挙げられた。新たにサタスクに参加してくれる子どもを増やすために今年度は広報活動に力を入れた。例えば、児童会館にチラシを置いたり、アカシアを別団体（フットサルやバレエ）で利用する家庭の保護者の方に説明会を行ったりした。また毎日新聞の取材を受け、「教育の森」（2012年9月29日）の記事にして頂いた。

さらに体験型イベントとして、9月に実施した「お菓子作り教室」では、サタスク以外の子どもにも参加してもらうように募集をかけた。その結

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
内田　俊樹	文学部		1
大野　晃司	教育学部	教育学科	2
鈴木　重明	理学部	化学科	2
竹内　康司	経済学部	経済学科	2
立木　佑佳	理学部	化学科	2
上村　　葵	文学部	人文科学科	3
大島太矩人	工学部	情報エレクトロニクス学科	3
川田　恭平	農学部	応用生命科学科	3
進藤　由紀	教育学部	教育学科	3
土崎　美咲	教育学部	教育学科	4
藤原　千佳	教育学部	教育学科	4
佐藤　　怜	環境社会工学科		修士1
金井　知行	（社会人）		
阿部　充樹	（北海学園大学）		3
阿部　薫明	歯学研究科	口腔医学専攻	教員

果、当日は14人もの外部参加があり、活気あふれるイベントとなった。「お菓子作り教室」ではクレープやアイスを作り、参加者からは「おいしかったので、またやりたい」など嬉しい感想を頂いた。そして、このイベントがきっかけとなり、サタスクに継続的に参加する子どもが増えた。

このようにサタスクの活動について広く理解してもらえるよう周知活動を行い、一定の成果をあげることができた。

その他（希望・反省等）

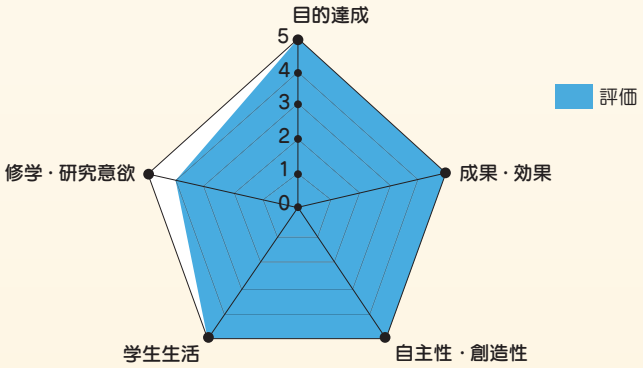
今年度の反省点としては参加ボランティアの減少が挙げられる。これは新規でサタスクの活動に参加したボランティアが定着しなかったことが原因である。子どもの増加に伴い、安全面への配慮、活動の拡大のためにボランティアの獲得が今後必要である。

そこで、現在学生ボランティア活動相談室メーリングリストでボランティア募集を行っている。さらに4月の新入生入学時期に合わせて、ポスターやクラオリパックによる募集、説明会の開催を予定している。

次に、サタスクの活動は子ども・ボランティアの潜在的ニーズを満たしているのか、という課題がある。参加者が定着しない背景には、短期的な活動に終始してしまい、長期的な内容が欠如しているように思われる。このような課題や子どもと関わる中で出てきた問題をサタスク以外の子ども支援団体と議論する場があればいいと以前から考えていた。例えば、互いの活動状況の情報交換をするワークショップの開催ができれば、サタスクボランティアだけでは気づかなかった提案が生まれるのではないだろうか。子ども支援団体に限らず、他団体との意見交換会を望んでいる。また元プロ採択団体同士で連絡が取り合えるような体制が整えば、活用したいと思う。

今年度も、元気プロジェクトに支援していただいたおかげで、活動を継続し内容の幅も広げることができました。希望としては、物品購入科目の拡大・柔軟化を検討していただけないだろうか。例えば、お菓子作り企画などの食材購入なども認めていただければ、更なる活動の展開が期待できると考えている。

実施評価



震災支援情報誌「OUEN TIMES」プロジェクト

代表／夏目　知子　　農学院　　生物資源科学専攻　　修士2年

■実施の内容

【目的と概要】

東日本大震災から1年以上が経過したが、まだまだ復興には時間がかかり長期的な支援が求められている。

当プロジェクトは、長期にわたって必要とされる震災復興に携わってもらう機会を提供するため、震災支援についての正しく具体的な情報を広く提供することを目的としている。

既存の支援団体が現地の需要を理解したうえで募集がなされた支援情報、チャリティーイベント情報、被災地の現状、実際に支援に参加した方の体験報告などを、手元に残る形としてフリーペーパーで発信する。なお、フリーペーパーの内容はウェブからも閲覧できるようにする。

【実施結果】

当初の予定では、フリーペーパーの発行を7月・10月・1月に行う予定であったが、記事内容、配布イベントの時期等を考慮し、7月・11月・3月の発行となった。各1000部発行し、配布を行った（表1、2参照）。

各フリーペーパーの発行に当たって、約2カ月の情報収集・編集作業を行った。

《OUEN TIMES vol.3》
発行日：7月10日
形状：A3裏表印刷、折りたたみ式
発行部数：1000部
記載内容：
・高校生が見た被災地
・他震災支援団体の活動
・チャリティーグッズ紹介
・ボランティア募集情報

《OUEN TIMES vol.4》
発行日：11月16日
形状：A5、冊子、16ページ
発行部数：1000部
記載内容：
・現地活動団体へのインタビュー
・道内学生東北の旅報告レポート・インタビュー
・札幌学生支援団体の適性診断・団体紹介
・みちのくkids活動紹介
・ボランティア募集情報
・東北グルメ・ツアー紹介

北大サステナビリティーウィーク期間（11／17）に開催しました、震災支援について考えるイベント「Sapporo Youth Conference for 3.11」では入場者全員にOUEN TIMESの配布を行いました。

《OUEN TIMES vol.5》
発行日：3月7日（予定）
形状：A5、冊子、12ページ
発行部数：1000部
掲載内容：
・現地活動団体へのインタビュー
・道内学生ボランティア体験記
・札幌学生支援団体紹介
・ボランティア募集情報

【成果】

外部への影響

・3.11の忘却を防ぐ

全ての学生ではないが、北大生に震災支援についての意識を持ってもらうことが出来た。

また、発行にあたり協力いただいた外部団体の方から、以下のような感想を頂くことができた。

→被災地より遠方である北海道での活動の意義を改めて考えることができた。

内部への影響

・プロジェクトに関わる1・2年生の成長

→情報収集にあたっての被災地の方や他震災支援団体とのやり取りの中で、メンバーの成長を見ることが出来た。編集作業や構成の推敲による思考力や配布における積極性などの成長が見られたが、特に外部の方と関わる上での礼儀や対話能力が向上した。

■実施時期

7月、11月、3月

■その他（希望・反省等）

第一回目の配布の際に、設置配布を多く行おうとしたが設置では手に

とってもらう部数は非常に少ない結果になってしまい、個人配布が多くを占めたために震災支援に普段関わっていない学生の手に渡る部数が少なかった。そのため、第二回から北大の教授のみなさんにお願いし、授業での配布を増やしていきたいと働きかけている。今後も配布方法を検討し、多数の北大生の手に情報誌を届けられるようにしていきたい。

また、感想などの読者からの反応を得る仕組みを構築していなかったことが反省に挙げられる。今後は、情報誌の効果の見定めや、コンテンツ内容の推敲のために読者からの反応を得る仕組みづくりをしていきたい。

Vol.3

イベント名	配布部数	日にち
Sapporo Youth Confarence for 3.11（札幌近郊震災支援団体協力イベント）	100	7月22日
学内		
高等教育推進機構	30	
北部食堂	5	
クラーク会館	20	
文系棟	15	
学生ボランティア活動相談室	5	
ピア・サポート室	20	
インフォメーションセンター　エルムの森	20	
授業配布	100	
学外		
酪農学園大学	100	
クラーク女子学生会館	10	
フラッグスタッフカフェ	5	
札幌エルプラザ	60	
国際情報高校	50	
他協力団体		
IVOLEA	3	
Sweet Treat	3	
各メンバー個人配布		
40部×10名	400	
計	946	

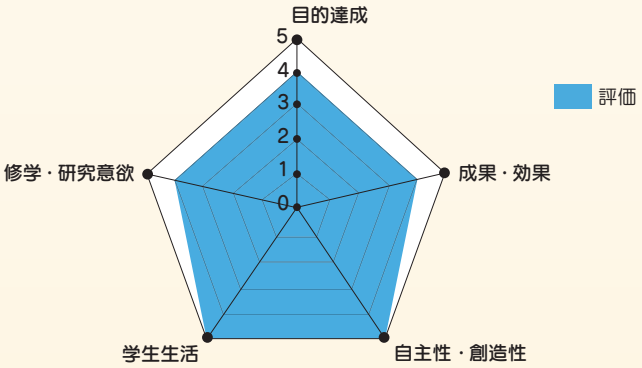
Vol.4

イベント名	配布部数	日にち
Sapporo Youth Confarence for 3.11（札幌近郊震災支援団体協力イベント）	100	11月17日
インド学生訪問団交流会	40	12月2日
地下歩行空間イベント	25	12月11日
東北復興ソーシャルビジネスフォーラム in北海道	100	2月5日
学内		
高等教育推進機構	30	
北部食堂	5	
クラーク会館	5	
文系棟	15	
学生ボランティア活動相談室	5	
ピア・サポート室	20	
インフォメーションセンター　エルムの森	20	
授業配布	45	
講演会	100	
学外		
酪農学園大学	100	
クラーク女子学生会館	10	
フラッグスタッフカフェ	5	
札幌エルプラザ	60	
サッポロファクトリー	50	
他協力団体		
IVOLEA	3	
Sweet Treat	3	
東北支援関連	30	
各メンバー個人配布		
20部×10名	200	
計	971	

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
中西　浩崇	環境科学院	環境起学専攻	修士2
長嶋　沙希	農学院	生物資源科学専攻	修士1
有坂　紀子	農学部		1
増田　　到	総合教育部理系総合		1
河東　政道	農学部	農業工学科	2

実施評価



大学の授業体験 with CAP

代表／笹森　瞳　　医学部　　医学科　　1年

実施の内容

北海道大学で、障害のある高校生等を対象にした模擬授業を企画した。札幌近郊の特別支援学校等に訪問し、学生の参加を呼び掛け、参加者に対して修学上必要なサポートをし、本学の授業を体験してもらうという企画である。

このような「大学の授業体験」を企画した背景を説明したい。我々Co-Assistance Project（CAP）は、北大における障害学生支援の充実を実現するため発足した学生団体である。障害のある学生を含め誰もが学べる、共生できる北大キャンパスを目指している。北海道大学には、障害があって学んでいる学生が他大学に比べて少ない。日本学生支援機構（JASSO）によると、2011年度の大学における障害学生在籍率の平均は0.31％であるが、我々の調査した本学における在籍率は約0.16％に留まっている。その大きな理由の一つに、本学は障害のある学生を支援する仕組みが十分でない、もしくは支援する用意があったとしてもそれを障害のある学生に伝え切れていないことが挙げられると考えた。必要な環境や情報の不備で、一部の人の就学の機会が制限されてしまうのは不合理であり、在学生にとっても多様な出会いや交流、切磋琢磨の可能性を狭められてしまうのは不利益である。そこで、障害のある高校生に本学が障害学生支援をしようとしていることを伝えて、入学希望というニーズを掘り起こし、充実した支援の仕組み作りに繋げようと考えた。ユニバーサルデザインに配慮した「大学の授業体験」を通して、障害のある人には大学とはどんなところか、北大ではどのようなことができるのかを伝えること、そして、大学には合理的配慮の実施を働き掛けていくことを意図した。

まず、障害のある学生が大学で学ぶうえで必要な支援は何かを調査した上で、その中で現在実施可能なものは何かを検討した。そして、複数の先生に模擬授業の講師をお願いし、近隣の特別支援学校などにおいて参加者を募った。当日は、本学教員の授業を2コマ、学生支援課とCAPによる本学における障害学生支援の現状や見通しなどの説明会、本学で学んでいる障害のある大学院生の講演会、学生生活に欠かせない図書館を見学するツアー等を行った。模擬講義においては教育学部と保健センターの教員に、説明会や図書館ツアーにおいては学生支援課と本学附属図書館に、必要なサポートの提供においては本学のノートテイカーと学外の点訳団体に、ご協力をお願いした。また、授業を展開するにあたって、教育学部の学生・院生にご協力いただいた。さらに、数名の北大生が当日スタッフとして手助けしてくれた。

事後の活動として、反省、報告、支援方法や他大学の支援状況の調査研究、近隣の大学の支援組織との交流などを行っている。

〈当日のタイムスケジュール〉

13：00～13：45　授業1
『ストレスマネジメントについて学ぶ』
斉藤美香先生（保健センター講師）
14：00～14：45　授業2
カウンセリング実習体験
『共感：他者の体験世界に歩み寄る』
松田康子先生（教育学研究院准教授）
15：00～15：30　説明会（学生支援課、CAP）
15：40～16：20　講演会
『重度障害者が北海道大学で学ぶ
～先例としての私の学生生活』
村松哲夫（文学研究科博士後期課程）
16：30～17：15　図書館ツアー（附属図書館）、個別相談会

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
石川　真一	医学部	医学科	1
塩澤佳奈子	水産学部		1
丸尾　結喜	医学部	保健学科	1
原田　知弥	医学部	医学科	1
原田　拓弥	医学部	医学科	1
箱山　昂汰	医学部	医学科	1
平井　康義	総合教育部理系総合		1
村松　哲夫	文学研究科	思想文化学専攻	博士3
沼崎　麻子	理学院	自然史科学専攻	博士1

実施時期

2012年10月28日（日）

実施の評価

本企画の目的は、「障害のある人への理解・支援、障害のある人と交流の輪を広げること」、「障害のある人を受け入れていくための大学の支援体制を、持続可能で恒常的なシステムとして確立すること」、そして「障害学生支援の取り組みのことを多くの人に知ってもらうこと」である。この3点それぞれについて、及び、企画から実施までの全体を通して、本企画を振り返る。

・目的1「理解・支援・交流の輪を広げる」に関して

当日は、障害のある高校生、障害のない高校生、特別支援学校の教員、北大生など、総勢45名の参加を得られたので、一定の規模で社会の人びとを巻き込めたと評価している。また、この企画を伝えるときに、岩見沢高等養護学校、札幌市立山の手養護学校、北海道高等盲学校、北海道高等聾学校にて先生方と話す機会を得られ、障害のある高校生の状況等の情報交換ができて大変有意義だった。さらに、他大学の障害学生支援室からも助言を頂けた。学内外からノートテイクや点字翻訳の協力も得られた。学生ボランティア活動相談室で企画紹介をしたところ、数名の

学生に当日スタッフとして加わってもらえた。このように、障害学生への理解・支援・交流を軸とした輪が少しずつ広がっていくのを感じた。一方で、今回は、他の障害のない学生の関わりが少なかった。“共生”の主役は全ての学生であるのだから、より多くの学生が障害や障害学生支援にもっと関心をもつように、創意工夫を重ねていきたい。

・目的2「支援をシステムとして確立する」に関して

今回は肢体不自由と聴覚障害のある高校生の参加があった。肢体不自由のある人に対しては、移動経路の確保や移動補助等を行い、聴覚障害のある人に対しては、ノートテイクや字幕挿入を行った映像資料の用意等を行った。その結果、必要な支援を提供すれば、授業に支障はないことを再確認できた。障害は個人によって異なるため、求められる支援のニーズも様々である。よって多様なニーズに応えることがいっそう求められていると考える。また、今回、学内の様々な職員、教員、学生、院生のご協力を頂けたことは、本学に障害学生への支援組織を作っていくうえで貴重な人間関係となると確信している。

・目的3「支援の取り組みを多くの人に伝える」に関して

本企画を開催したことで、障害学生支援の取り組みを学内外に一定程度周知する効果があった。他の大学から学ばせてもらったり、交流したりするネットワークの構築も進んでいる。企画のために必要な情報発信に留まらず、一人でも多くの人に障害学生支援の取り組みを知ってもらうことと、障害学生支援を行っている大学に関する情報を求めている人に確実に伝えることの両方を進めていきたい。

・全体を通して

このような企画は本学で初めてであったので戸惑うことがあった一方で、持っている自主性、創造性、行動力、エネルギーを存分に生かす機会となり、運営側としても大変勉強になった。とりわけ、今まで誰もやっていないことを、大学に入りたての1年生が中心となってやったことを特筆しておきたい。このような経験は、今後の学生生活や人生に、直接的であれ間接的であれ、大いに寄与すると確信する。それと同時に、本企画で蓄積された経験と情報、人間関係と研究成果は、大学に支援組織をあるべき形で構築することに役立つと信じる。いま、我々自身、支援組織の理想像を自分たちの中で組み立てることの難しさも知りつつ、徐々にそのイメージを作り、一つひとつ言葉で表現して伝えようと取り組んでいる。

■その他（希望・反省等）

（要望）

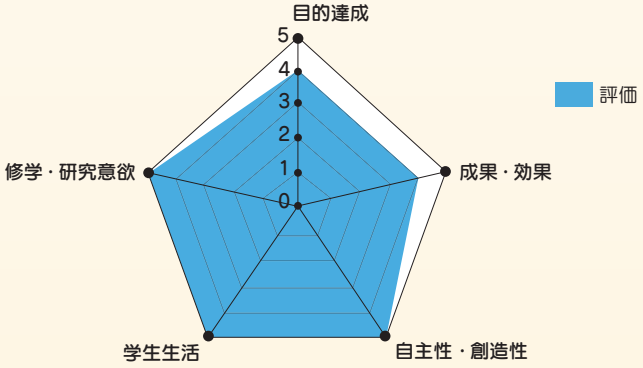
札幌近郊における交通費に関して、今年度はオレンジカード、ウィズユーカードを購入することで対応していただきましたが、これらのカードは余剰金額の払い戻しが不可能です。来年度以降は払い戻しが可能なKitacaやSapicaの購入を検討していただきたいです。

また、北大元気プロジェクト採択企画であることを証明するもの（証明書、公式ロゴ等）があれば、企画運営団体の信頼度の向上に寄与し、対外的な交渉を進めやすいと考えられます。

（謝辞）

最後になりましたが、私どもの活動に多大なご支援を頂いたことにスタッフ一同、心より感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■実施評価



第7回北海道大学国際文化祭

代表／ノヴコヴィチ・ビリャナ　Novkovic Biljana　環境科学院　生物圏科学専攻　博士3年

実施の内容

参加者募集：インターネット上（メール、HUISAのwebページ）、各学生会館にポスターを掲示

参加者選択、プログラム作成：応募者と相談し、順番、構造などを決めた

練　習　会：農学部で練習

広　　報：国際プラザ、キャンパス、webページ、パンフレットの作成と配布

装　　飾：テーマを考え（クリスマス）、装飾品を購入した

ホールでの練習：当日午前中

文化祭本番

実施時期

10月：参加者募集

12月上旬：参加者選択、プログラム作成

12月上旬から：国際プラザ、キャンパス等での広報

12月下旬：装飾

12月22日：練習会

12月24日午前中：ホールでの練習

12月24日：午後3時～5時　文化祭

構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
Shahriar Zaman	環境科学院	環境起学専攻	修士2
Lennikov Anton	医学研究科	医学専攻	博士4
Kurniawan Stella Kristanti	農学院	応用生物科学専攻	修士1
Alameen Najjar	情報科学研究科	メディアネットワーク専攻	修士1
Byamba Bolorchimeg	環境科学院	環境起学専攻	修士2
Delnur Anwar	医学研究科	医学専攻	博士1

実施の評価

内　　容：留学生がダンス、民族衣装、歌などで自国の文化を紹介

日本人学生、札幌市民との交流ができるイベント

過去7年間ほとんど国際文化祭が開かれてきた

過去数年の文化祭は小さな規模で行われ、札幌市民との交流も限定されていた

今回目的：参加者、来場者の数を増やす

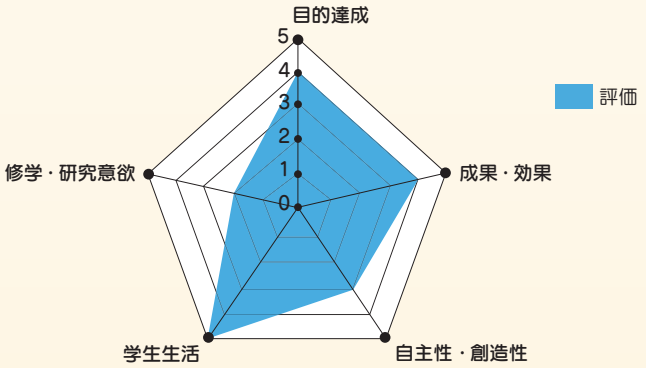
各国の文化を基に、北海道大学の留学生、日本人学生と札幌市民がふれ合う機会を作る

その他（希望・反省等）

「場所が見つかりにくかった」という意見が多かった。もっと安くて、分かりやすかった場所でよかったかもしれない。L-plaza、または、予約はとりにくいが、理想的にはクラーク会館を使用したい。

宣伝をより積極的にした方が良かったです。また、無料ではなく、安価なチケット（300～500円程度）にした方が誠実さが伝わり、来場者が増えるという意見がありました。

実施評価



Hokkaido University International Student Association
7th
International
Culture
?
Festival
第7回北海道大学国際文化祭
12月24日
札幌共済ホール
December 24th
Sapporo Kyosai Hall

夏休み企画！
ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO！

代表／小四郎丸　拓馬　　理学院　　自然史科学専攻　　修士1年

■実施の内容

北海道大学総合博物館にて、ニンテンドーDSのフリーソフト「じぶんでつくるニンテンドーDSガイド」を用いて作成した音声ガイドを配信し、来場者に持参したニンテンドーDSで音声ガイドを受信してもらい、実際に展示物の前で音声による解説を聞いてもらうという企画を実施した。

来場者の主なターゲットは札幌圏の小学校高学年の児童とし、開催時期は彼らが夏休みで来場しやすい8月4日（土）・5日（日）とした。

音声ガイド作成には上記のとおり、任天堂より無料で配布されている「じぶんでつくるニンテンドーDSガイド」というフリーソフトを用いた。1トラック30秒の音声ガイドを30個作成し、その対象は北大総合博物館3階の「化石」及びその周辺に展示されている「鉱物」「地質」のコーナーであった。なお、ガイド内容については北大の研究者や博物館の教員の方に監修をお願いした上で本企画構成員が原稿を作成した。

・**北大総合博物館告知サイト**
http://www.museum.hokudai.ac.jp/event/article/133/
・**北大時報**
http://www.hokudai.ac.jp/bureau/news/jihou/jihou1209/jihou1209.pdf

■実施時期

平成24年8月4日（土）、5日（日）
9：30～16：30

■実施の評価

本企画の目的は、ニンテンドーDSという子ども達にとってなじみの深いツールを用いることによって、小学生及びその保護者の北大総合博物館への興味を惹きだし、来館を促し、さらに展示物への理解を深めてもらうことであった。

北大総合博物館への来館を促すという点においては、2日合わせて約400名という北大総合博物館としては異例の来場者数を記録したことや、たった二日間の企画でありながら初日・二日目と続けて来場してくれたリピーターの存在、またテレビや新聞などでも取り上げられ注目を集めたことからも、大変成功したのではないかと考えている。

また、展示物への理解を深めてもらうことができたかという点についても、アンケートの結果を見るに概ね成功することができたのではないかと考えている。（別紙参照）

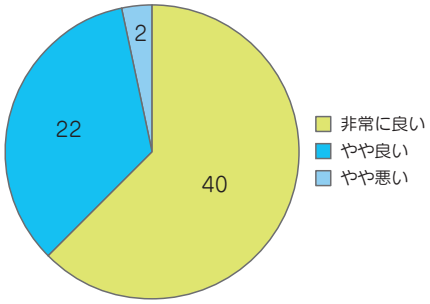
事前準備、当日の運営共に大きな問題は起こらず、北大総合博物館の先生方の支援のおかげもあり大変有意義な企画を催すことができた。北大元気プロジェクト様におきましても、企画の肝となるニンテンドーDSの購入にお力添えをいただきましたことを深く御礼申し上げます。

■構成員

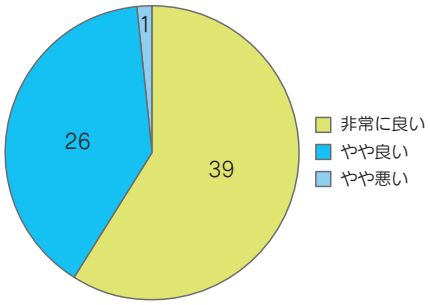
氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
石川　暁登	理学院	自然史科学専攻	修士1
海老原佳帆	理学院	自然史科学専攻	修士1
緒方　秀仁	理学院	自然史科学専攻	修士1
加納千紗都	理学院	自然史科学専攻	修士1
濱田　怜奈	理学院	自然史科学専攻	修士1

アンケート結果

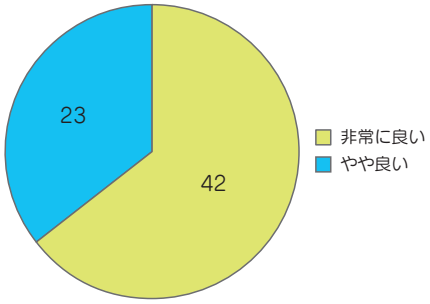
音声ガイドの内容（64）



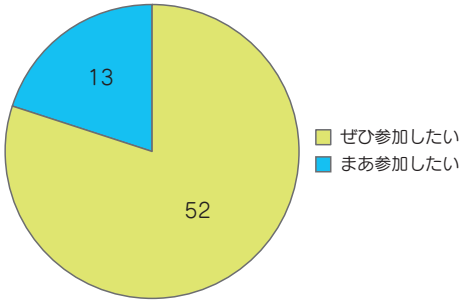
お子様の反応（66）



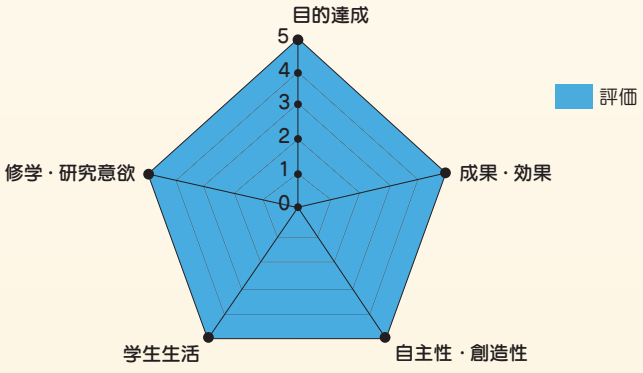
企画全体（65）



また参加したいですか？（65）



実施評価



北大健「口」プロジェクト2012

代表／中澤誠多朗　　歯学研究科　高齢者歯科学専攻　　博士3年

実施の内容

［小児口腔保健］

2012/6/16　ふるびら幼児センターみらい訪問
— 劇・紙芝居・ブラッシング指導・指模型作成・保護者向け講演
2012/8/21　桑園幼稚園訪問事前打ち合わせ
2012/9/9　ミニ大通おさんぽまつりブース出展（札幌市立大“act”と共同で）
— マンモスの歯の化石・クジラの歯の展示、動物の食性と歯の形態について
2012/9/20　桑園幼稚園訪問
— 劇・紙芝居・ブラッシング指導・保護者向け講演
2012/9/22　発寒ひかり保育園訪問
— 劇・紙芝居・ブラッシング指導・園児と交流
2012/12/8　八軒太陽の子保育園訪問
— 劇・紙芝居・ブラッシング指導・園児と交流

活動内容については各園と個別に調整し、計画書に記載した内容で活動を行った。

［成人・高齢者口腔保健］

2012/5/29　新川エバーライフ見学・打ち合わせ
2012/7/6　第一回勉強会（講師：中澤）
— 超高齢社会と歯科に求められる役割
2012/7/13　第二回勉強会（講師：中澤）
— 高齢者の特徴と口腔の加齢的変化
2012/7/20　第三回勉強会（講師：中澤）
— 高齢者の口腔ケアの理論と実際
2012/8/21　ミニ大通おさんぽまつり主催者と打ち合わせ
2012/9/5　札幌市立大学“act”とミーティング
2012/9/9　ミニ大通おさんぽまつりブース出展（札幌市立大“act”と共同で）
— 口腔の健康に関する調査とアンケート（別紙1、2参照）
2012/9/24　新川エバーライフ訪問（北海道歯科衛生士会“雅の会”と共同で）
— 個別の口腔ケア、集団でのお口の体操
2013/2/25　新川エバーライフ訪問の予定だったが、ホームにてインフルエンザ発症のため訪問は中止となった。
2013/3/23（予定）　反省会・次回の計画についてミーティング

特養訪問における個別の口腔ケアに関しては、安全を考慮し歯科医師免許を持つ大学院生が実際のケアを行い、その他の学生は補助を行うこととした。

上記のとおり、インフルエンザで特養訪問が1回キャンセルになった以外は概ね計画書のとおり実施することができた。

実施時期

2012年5月29日～2013年3月23日（予定）

実施の評価

〈評価〉

まず、事故なく安全にプロジェクトを遂行するだけでなく、札幌市立大“act”や北海道歯科衛生士会といった外部の組織とも連携して活動を行うという目標を達成することができた。

前回の継続となる小児口腔保健分野では内容のさらなる充実を図ったほか、新規案件の成人・高齢者口腔保健分野では特養訪問・おさんぽまつり参加など、活動のフィールドを広げることができた。

〈反省〉

活動にほぼすべて参加するコアメンバーが形成されつつある一方、新規参加者がほとんど増えておらず、広報と勧誘の体制の見直しと充実が求められる。

特養訪問については初回でもあることから、事故のないことを第一としたが、反面活動の内容が限定されたものにならざるを得ず、施設の利用者あるいは職員にとってあまりメリットを感じない内容となったかもしれない。

〈今後の展望〉

小児口腔保健分野については、これまでの経験を活かしてさらに内容の充実したものとしていきたい。

成人・高齢者口腔保健分野に関して、特に特養訪問については、我々の活動が参加する高齢者（施設）の益に資するよう、内容の見直しおよび我々の知識・技術の蓄積を目指したい。

現段階で具体的には、勉強会で外部から講師を招聘する、あるいは実際にケアマネージャー資格試験の勉強を通じてより実践的な介護の知識を得る、などの方策を考えている。

構成員

氏名	学部・研究科	学年	担当する役割
更田 恵理子	歯学研究科	博士3	副代表
永井　伯弥	歯学部	6	
上柳安友子	歯学部	6	
木下真里菜	歯学部	6	
町田　友梨	歯学部	6	
中元　絢子	歯学部	6	
坂東　智子	歯学部	6	
横井　有沙	歯学部	6	
長尾　敬志	歯学部	6	
茶谷　竜仁	歯学部	6	
戸井田　侑	歯学部	6	
新阜　宏平	歯学部	5	
石田　雄大	歯学部	5	
澤　みなみ	歯学部	5	
金井香央梨	歯学部	5	
前川　翠	歯学部	4	副代表
太田　祐介	歯学部	3	会計担当
川合　大史	歯学部	2	企画担当
山本祐太郎	歯学部	1	

別紙1

氏名：

■口腔内評価シート

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

残根を除いた歯数：＿＿本　　Eichner 分類：A1・B1・B2・B3・B4・C

義歯使用（上顎）：有・無　（下顎）：有・無

口腔清掃状態（残存歯）：良・概良・不良　（義歯）：良・概良・不良

口腔乾燥：なし・軽度・中等度・重度

■筋力・機能評価シート

◆ガム咀嚼力判定：1・2・3・4・5

◆舌圧測定

◆握力測定（右）：＿＿kg　（左）：＿＿kg　◆開眼片足立ち：＿＿秒

■栄養評価

A. 過去 3 ヶ月間で食欲不振、消化器系の問題、そしゃく・嚥下困難などで食事量が減少しましたか？

（0＝著しい食事量の減少 ・1＝中等度の食事量の減少 ・2＝食事量の減少なし）

B. 過去 3 ヶ月間で体重の減少がありましたか？

（0＝3 kg 以上の減少 ・1＝わからない ・2＝1～3 kg の減少 ・3＝体重減少なし）

C. 自力で歩けますか？

（0＝寝たきりまたは車椅子を常時使用 ・1＝ベッドや車椅子を離れられるが、歩いて外出はできない ・2＝自由に歩いて外出できる）

D. 過去 3 ヶ月間で精神的ストレスや急性疾患を経験しましたか？

（0＝はい 2＝いいえ）

E.神経・精神的問題の有無

（0＝強度認知症またはうつ状態 ・1＝中程度の認知症 ・2＝精神的問題なし）

F. BMI (kg/m²)：体重(kg)÷身長(m²)

（0＝BMI が 19 未満 ・1＝BMI が 19 以上、21 未満 ・2＝BMI が 21 以上、23 未満・3＝BMI が 23 以上）

別紙2

質問紙　　回答日：　年　月　日

氏名	(ふりがな)	性別	男 ・ 女
生年月日	明治 ・ 大正 ・ 昭和　年　月　日	年齢	歳

身長＿＿cm 体重＿＿kg 最低血圧＿＿mmHg、最高血圧＿＿mmHg

◆以下の食品について、噛めるものは○の欄に、噛めないものは× の欄に印をつけてください。

		○噛める	×噛めない
1	ピーナッツ	○	×
2	たくあん	○	×
3	固焼きせんべい	○	×
4	フランスパン	○	×
5	とんかつ	○	×
6	酢だこ	○	×
7	らっきょう	○	×
8	ホタテ貝柱干物	○	×
9	スルメ	○	×
10	イカの刺身	○	×
11	こんにゃく	○	×
12	ちくわ	○	×
13	ごはん	○	×
14	まぐろの刺身	○	×
15	焼き魚	○	×

◆お口の中の状況についてお聞きします。

➢ お口の健康はどうですか？

1．よい　2．まあよい　3．あまりよくない　4．よくない

➢ 歯磨きはいつしていますか？（複数回答可）

1．朝起きてすぐ　2．朝食後　3．昼食後　4．夕食後　5．寝る前　6．その他（　　）

➢ 歯磨きには何を使っていますか？（複数回答可）

1．歯ブラシ　2．電動歯ブラシ　3．歯間ブラシ　4．糸ようじ　5．その他（　　）

➢ 入れ歯は使っていますか？　1．はい　2．いいえ

◆入れ歯を使っている方にお聞きします。

➢ 入れ歯に満足していますか？

1．満足　2．まあ満足　3．まあ不満　4．不満

➢ 入れ歯磨きはいつしていますか？（複数回答可）

1．朝起きてすぐ　2．朝食後　3．昼食後　4．夕食後　5．寝る前　6．その他（　　）

➢ 入れ歯磨きに使っているのはどれですか？（複数回答可）

1．入れ歯用ブラシ　2．歯ブラシ　3．入れ歯洗浄剤　4．その他（　　）

●転倒・つまずき経験

この一年間（昨年９月10日～今年９月９日まで）に**転んだ**ことがありますか。該当する番号に○をお付け下さい。

【転倒＝自分の意思によらず身体バランスを崩し、膝より上の身体の一部が地面や床にふれた場合】

1．はい　2．いいえ

⇒1．はい　に○を付けた方への質問です。何回**転び**ましたか。　＿＿＿回

この一年間（昨年１１月２１日～今年１１月２０日まで）に**つまずいた**ことがありますか。該当する番号に○をお付け下さい。

1．はい　2．いいえ

⇒1．はい　に○を付けた方への質問です。何回**つまずき**ましたか。　＿＿＿回

●外出頻度

１週間の平均的な外出頻度に該当する番号に○をお付け下さい。

（隣近所へ行く、買い物なども含みます）

a. 毎日　b. 週に5～6回　c. 週に3～4回　d. 週に1～2　e. 1回以下

●老研式活動能力指標

日常の活動性についてお伺いします。項目ごとに、「はい」か「いいえ」に○をお付け下さい。

A. バスや電車を使って１人で外出できますか。　1．はい　2．いいえ

B. 日用品の買い物ができますか。　1．はい　2．いいえ

C. 自分で食事の用意ができますか。　1．はい　2．いいえ

D. 請求書の支払いができますか。　1．はい　2．いいえ

E. 銀行預金・郵便貯金の出し入れができますか。　1．はい　2．いいえ

F. 年金などの書類が書けますか。　1．はい　2．いいえ

G. 新聞を読んでいますか。　1．はい　2．いいえ

H. 本や雑誌を読んでいますか。　1．はい　2．いいえ

I. 健康についての記事や番組に興味はありますか。　1．はい　2．いいえ

J. 友達の家を訪ねることがありますか。　1．はい　2．いいえ

K. 家族や友達の相談に乗ることがありますか。　1．はい　2．いいえ

L. 病人を見舞うことができますか。　1．はい　2．いいえ

M. 若い人に自分から話しかけることがありますか。　1．はい　2．いいえ

●休まずあるける距離

連続して歩行できる距離を下記の中から選び**一つだけ○をお付け下さい。**

1．　10m未満

2．　10m～50m未満

3．　50m～100m未満

4．　100m～500m未満

5．　500m～1km未満

6．　1km以上

●運動習慣ステージ

a. 運動習慣と、あなたの気持を最もよく表わしているものに**一つだけ○をお付け下さい。**

注：ここでいう運動は、スポーツ、散歩、軽い体操やレクレーションなどの軽運動も含みます。

1．私は現在、運動はしていない。また、これから先もするつもりはない
2．私は現在、運動をしていない。しかし、近い将来（6か月以内）に始めようとは思っている
3．私は現在、30分以上の運動をしている。しかし、定期的（2回以上/週）ではない
4．私は現在、定期的（3回以上/週）に30分以上の運動をしている。しかし、始めてから6か月以内である
5．私は現在、定期的（3回以上/週）に30分以上の運動をしている。また、6か月以上継続している

b. 現在運動している方にお伺いします。どんな運動をされていますか？

（1．　　2．　　）

◆あなたの介護状態についてお聞きします。

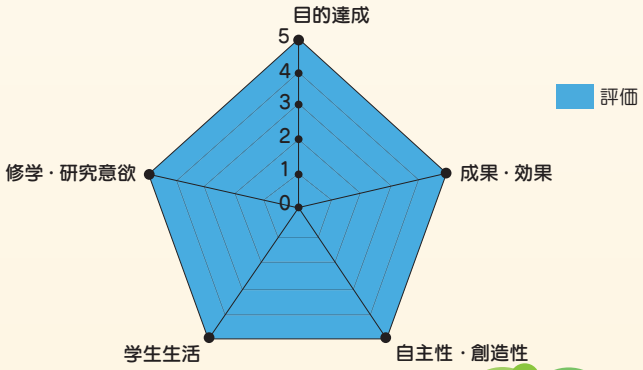
➢ 要介護認定を受けていますか　1．受けている　2．受けていない

⇒1．受けている　に○を付けた方への質問です。

あなたの「要介護度」はどれですか	□要支援1　□要支援2
	□ 要介護1　□要介護2　□要介護3
	□要介護4　□要介護5

ご協力ありがとうございました

■実施評価



■その他（希望・反省等）

活動補助の範囲について、物品だけでなくボランティア保険の保険料といった面でも補助が受けられるようになると、より活動の幅が広がるのではないかと考えます。

北大金葉祭

代表／小島　隆志　　教育学部　　教育学科　　4年

実施の内容

【実施内容】

11月3日、4日の10時から20時まで、北大構内13条通り付近および農学部ローンで「北大金葉祭」というイベント名で、一般市民、観光客を対象に秋をテーマにした市民参加型、自然鑑賞型の以下の企画を行った。

【市民参加型】

①落ち葉のプレイルーム
テントの中に落ち葉を敷き詰め、子供たちの遊び場としてメンバーと子供が交流した

②銀杏並木café＆野外ステージ
北大カフェプロジェクトと協力し、カフェの運営および音楽サークルによる演奏で、来場者の休憩場所となった

③自然工作体験
様々な年齢層の方々が落ち葉を使い、しおりを作ることで、北大の秋を体感した

④電動カートDE北大散策
電動カートの停留所を設けることで、銀杏並木から様々な場所へ来場者が足を運ぶ役割を果たした

⑤ホクホクおいも屋さん
自然に囲まれ、秋の旬の食べ物を食べることで、来場者の癒しの場となった

【自然鑑賞型】

⑥銀杏並木のライトアップ
北大史上初のライトアップイベントを行い、たくさんの来場者を感動させることができた

⑦写真・絵画展示
北大の四季や建物の写真および絵画を展示することで、来場者に秋以外の北大の魅力を伝えた

⑦銀杏募金
東日本大震災への募金として、たくさんの来場者に支援いただいた

実施時期

2012年11月3日（土）4日（日）

実施の評価

北大金葉祭は、北大の景観を楽しみに来た観光客や市民が、景観をさらに魅力的に感じてもらうことと、北大生と交流を行うことで、北大にさらに親近感を持ち好きになってもらうことが目的としたプロジェクトである。今年の金葉祭では、「自然工作体験」および北大カフェプロジェクトと協力した「銀杏並木café＆野外ステージ」などで観光客や市民の方々が北大生のメンバーと交流を行うことができた。また、北大史上初の「銀杏並木ライトアップ」を行うことで、多くの来場者および新聞などのメディアを通して目にした方々に北大の自然の素晴らしさや北大の魅力を伝えることができた。

今回の金葉祭は2日間ともあいにくの雨での開催となったが、北大や金葉祭のホームページ、Twitter、Facebookやポスターなどの広報により、たくさんの来場者を得ることができた。

金葉祭当日は、運営ボランティアとして多くの北大生が参加し、メンバーと北大生や運営ボランティアとして参加した人たち同士の交流も生むことができ、学部や学年を超えたつながりを作ることができた。

その他（希望・反省等）

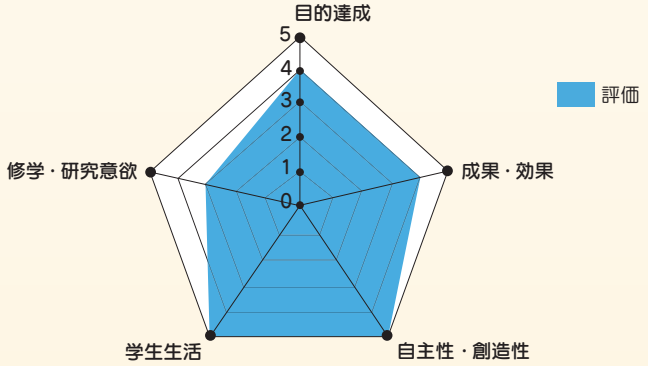
初年度ということもあり、至らない点が多く、開催することだけで手一杯になっている箇所も多く見られた。しかし、当日は多くの方々に満足して頂けるお祭りにすることができた。次年度以降も北大の秋の魅力を発信できるイベントを開催していきたいと考えている。

最後になりましたが、採択して頂き開催に至るまで、様々な面でサポートして頂いた学生支援課の皆様には大変お世話になりました。メンバー一同感謝しています。ありがとうございました。

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
小浦　拓馬	農学部	生物資源科学科	4
山崎　静香	経済学部		4
大沼　高広	医学部	保健学科	3
島崎　柚季	文学部		3
鈴木麟太郎	工学部		2
菅井　　僚	教育学部		1
遠田　　健	医学部	医学科	1

実施評価



資料1．収支報告

収入

項目	金額
協賛金（富士屋）	4,000
協賛金（とりのすけ）	4,000
協賛金（ジオプレス）	4,000
協賛金（山次郎）	4,000
協賛金（クラーク亭）	4,000
協賛金（TYRELL）	4,000
協賛金（桑園自動車学校）	4,000
協賛金（時館）	4,000
個人協賛	5,000
焼いも売上	25,500
缶バッジ代	6,652
メンバー負担	18,512
合　計	87,664

支出

項目	金額
印刷	15,116
保険	5,800
缶バッジ	6,652
ブランコ	5,525
焼いも体験準備	16,217
自然工作体験準備	2,919
ジャガイモ	3,600
サツマイモ	10,000
写真展示	20,115
ペン	210
リコーカード	1,000
ラベル用紙	510
合　計	87,664

資料2．当日の様子

写真・絵画展示

男声合唱団による野外ステージ

銀杏並木ライトアップ

自然工作体験

銀杏並木café

メンバーの集合写真

北大祭環境負荷軽減プロジェクト

代表／中屋　楓　　農学部　　生物資源科学科　　2年

■実施の内容

6月に行われる北大祭において、毎年多数の模擬店の出店に伴い、大量の使い捨て容器が使用されます。そこで北大祭全学事務局では業者から容器を一括購入・販売することによって出店団体の負担を軽減し、効率化を図りました。さらに斡旋販売する容器として環境負荷の少ないものを取り扱うことにより、北大祭全体での環境負荷の軽減を目指しました。

今年度、北大祭事務局で販売を斡旋した容器は以下の通りです。

・㈱大黒工業社製　パルプモールドパッケージ
　…どんぶり型、トレー型、パック型の3種類
・東罐興業㈱製　トウカンヒモクザイBB
　…コップ1種類
　購入元：㈱アベシン

パルプモールドパッケージは、葦やバガスを原材料として作られています。葦は木よりも成長が早く、成長の過程で二酸化炭素を大量に吸収します。バガスはサトウキビの搾りかすで、製糖の過程で大量に発生し、通常は廃棄されるものを有効活用しています。またバガスは木材に比べ柔らかく、製造に必要なエネルギーが木材より少ない、という利点もあります。

トウカンヒモクザイBBは、パルプモールドパッケージ同様、植物である葦や竹、農産廃物繊維であるバガスや麦わら、栽培植物繊維である麻などを原材料として作られています。

いずれも木を使用しないため、製造の段階から森林資源の節約・保護につながります。

これらパルプモールドパッケージとトウカンヒモクザイBBの情報は、画像とともに第54回北大祭のパンフレットやリーフレット、北大祭公式WEBサイト、さらに実行委員会で発行している学内広報誌に掲載し、学内、学外の人々に対して宣伝、周知に努めました。

■実施時期

4月27日～5月12日	WEBサイト上で出店団体から使用希望容器とその個数を受付
5月14日、15日	出店団体から容器の代金の受取
5月23日	容器を業者に発注
6月　6日	出店団体に容器の受渡し
6月　7日～10日	北大祭当日 容器の販売、ゴミの回収
7月　2日	業者への料金支払い

プロジェクト終了

■構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
清水　哲夫	医学部	医学科	2
上條　将貴	経済学部		2
松尾　友樹	薬学部	薬学科	2
遠藤　正大	法学部		2
伊藤　大季	経済学部		2
古田　龍太	理学部	生物科学科	2
水野　聡充	文学部	人文科学科	2
藤川　宗志	水産学部	資源機能化学科	2
脇田　幸典	工学部	情報エレクトロニクス学科	2
小川万梨野	医学部	保健学科	2
米田みづ穂	医学部	保健学科	2
岡田　光生	工学部	環境社会工学科	2
広島　裕治	医学部	保健学科	2
三谷　陽香	工学部	応用理工系学科	2
古川　真帆	工学部	応用理工系学科	2
柳原　潤己	経済学部		2
松崎　伸弘	工学部	応用理工系学科	2
南村　拓海	文学部	人文科学科	2
奥村　春香	農学部	農業経済学科	2
加藤悠太郎	文学部	人文科学科	2
管　　快斗	農学部	農業工学科	2
太田　　晶	理学部	地球惑星科学科	2
山田　裕子	理学部	地球惑星科学科	2
熊谷　菜海	医学部	保健学科	2
片桐　宙平	理学部	地球惑星科学科	2
澤田　一真	工学部	情報エレクトロニクス学科	2

■実施の評価

・容器の低価格販売

北大元気プロジェクトに昨年度から継続してご支援いただいたおかげで、昨年度よりも容器類の値段を原価より下げて販売することが出来ました。しかし、まだ紙製の市販の容器類と比べると高価であり、食品を扱う団体の総数から見て北大祭事務局推奨の容器を利用してくださった団体はまだ多いとはいえない状況です。

・容器販売個数の増加

特に今年度から採用したトウカンヒモクザイBBは、昨年度まで採用していたコップと比べて安価での販売が可能であったのもあり、販売個数は9000個から16800個へと大きく伸びました。これは昨年よりも多くの団体で北大祭事務局が推奨する容器を利用してくださったからだと思います。

・北大祭事務局員の負担の軽減

昨年度まで、コップは北大祭事務局員が洗浄し、業者へ返却していたのですが、トウカンヒモクザイBBはそのまま捨てることが出来るため事務局員の負担を軽減し、その分北大祭運営の方へ力を回すことが出来ました。しかし北大祭全体を通したゴミの体積は昨年度とほとんど変わりませんでした。

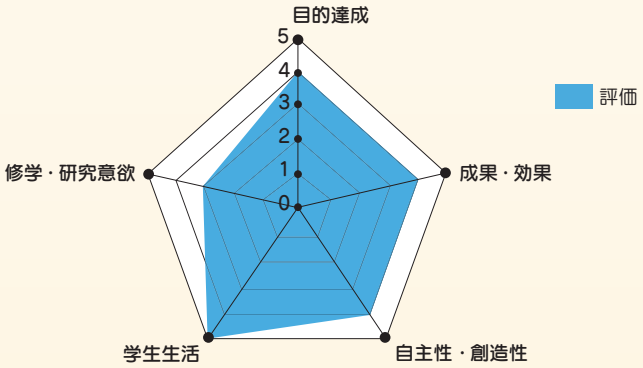
■その他（希望・反省等）

今年度も北大祭全体で見たとき、こちらで斡旋している容器を利用してくださったのは保健学科祭の1団体と楡陵祭の出店団体の参加だけでした。また楡陵祭で食品を扱う団体のうち、北大祭事務局が推奨している容器を利用してくださったのは約半数であり、まだ多いとは言えないと思います。この改善策として容器のより一層の低価格化と、容器販売の告知の徹底が考えられます。今年度からWEB上で注文を受け付けることにしましたが、初年度ということもあり告知が不十分だったように感じました。来年度以降は告知方法を工夫し多くの団体に利用してもらえるようにしたいです。

この活動を続けていき、北大祭を通して少しでも環境に対する意識を高めるきっかけになればいいと思います。

最後に、北大元気プロジェクトに採択いただき、ありがとうございました。

■実施評価



北大生のみんな　留学生センター「日本語イブニングコース」で外国人に日本語を教えよう!!

代表／上林　彰仁　　理学院　　自然史科学専攻　　修士2年

実施の内容

2010年10月から北大留学生センターで「日本語イブニング・コース」（以下、イブニング・コース、またはコース）という、日本語教師を志望する北大生と市民ボランティアが北大留学生（およびその家族・子ども）に日本語を教える講座が開かれてきた[1)、2)]。このコースは基本的に毎週火曜日と金曜日の18：15～20：30に開講されている。

本プロジェクトでは、国際交流や留学、日本語教育に興味を持つ北大生がイブニング・コースで教壇に立つ支援を、学生側から進めた。プロジェクト代表者・上林は、2010年の初開講より日本語インストラクターとしてイブニング・コースに積極的に関ってきた。留学生とその家族を対象とした日本文化・社会への理解を促進するイブニング・コースの目的に賛同する若い北大生（つまり、学部生や修士院生）を集めることは、コースにとって重要である。イブニング・コースを継続していくためには、今後もコースに携わる北大生を人数・日本語指導力の点で増強する必要がある。

また、中期目標[3)]で掲げられた「国際性の涵養」を北大生に促すことも本プロジェクトは目指した。外国人に日本語を教えることは、北大生の　①国際活動への興味・自信の喚起、②コミュニケーション力向上、③異文化理解の向上　に繋がると考えたためである。

2012年度秋学期の開始直前には、留学生センターにて北大生を主な対象に「日本語イブニング・コース説明会＆インストラクター講習会」を開催した（2012年9月7日、21日の計2回）。参加者はのべ28名であった（日本人学生：のべ17名、留学生：のべ8名、学外参加市民：のべ3名）。

説明会・講習会で集まった北大生には、同年10月12日の「日本語イブニング・コース2012　秋学期」開始以降、同年度春学期から他のインストラクターが既に開講・実施していた授業を随時参観してもらった。そこでは、外国人の日本語学習者と机をならべての「生徒体験」や日本語ネイティブとしての指導補助、そして、実際に外国人に日本語を教えるインストラクターとしての機会を提供した。

実施時期

2012年7月25日～2013年2月28日

※ただし、「元気プロジェクト2012」採択前の2012年4月から活動準備を開始した。

実施の評価

本プロジェクトでイブニング・コースのインストラクターとなった北大生は、　①留学せずとも国内で可能な異文化体験、②コンスタントな外国人との出会い　を体験でき、日本にいながらにして国際交流の機会を得られたといえるだろう。

インストラクターとして外国人に日本語を教えた北大生は、全員が日本語教育のプロを目指すわけではない。しかし、彼らは「自分たちは日本語をつかって暮らしている人間である」ということに改めて気付き、自分の特技・造詣を最大限に活かした独創的な日本語クラスを外国人に提供した。例えば、「アニメで学ぶ日本語」、「ギター演奏入門＆カタカナ語彙練習」、「日本語の歌クラス」がそうである。また、日本語ができる外国人留学生は「インドネシア人留学生によるインドネシア人のための日本語文法」、「日本語教師志望者のための中国語入門」等のクラスを実施した。

また、本プロジェクトでは、毎週火曜日・金曜日の日本語授業以外でも、インストラクターが自己研鑽と指導力向上に励む機会を増やすことができた。2012年10月から毎週1回、留学生センター教員・北大生・留学生・留学生の家族・札幌市民を交えた日本語教育勉強会を留学生センターで定期的に開催している（2013年2月末の時点で計9名が参加中）。この取り組みは、「北大元気プロジェクト2012」の援助によって、イブニング・コースに日本語教科書等の教材が種類・数ともに充実できたことで実現した。

しかしながら、本年度は元気プロジェクトによる「日本語イブニング・コース」支援でもカバーできなかった課題が残った。それは、中・上級以上の日本語能力を持つ外国人からの学習要望に応えきれなかったことである。今後は、北大生と市民ボランティアでより一層の協力を図り、日本語インストラクターの質（指導力）と量（人数）を厚くしていきたい。

「日本語イブニング・コース」の活動を若い北大生が継続的に支援していくことで、本プロジェクトは学内外に広く認識される。これは、「北大に来れば世界で日本語を教えられる人材に成長する」という北大の国際性を、絶えず社会へ発信することに繋がっていく。平成25年度も、ぜひこのプロジェクトを継続したい。

その他（希望・反省等）

統計データ　「日本語イブニング・コース2012」の春学期（2012年4月13日～8月10日）と秋学期（2012年10月12日～2013年2月15日）の参加者数推移を、それぞれ図1と図2に示した。

謝辞　本プロジェクトの実施にあたり終始適切なご協力・ご助言を賜った国際本部の教職員の皆様に、心より御礼申し上げます。

【文献、資料】

1）山下好孝・本間淳子・田中里実（2010）日本語イブニング・コース中間報告.
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/46740/1/JISC14_002.pdf
2）山下好孝（2011）2011年度日本語イブニング・コース中間報告.
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/49300/1/JISC15_004.pdf
3）国立大学法人北海道大学（2012）中期目標・中期計画一覧表.
http://www.hokudai.ac.jp/pr/tenken/hyouka/houjin/2nd/chuki.pdf

実施評価

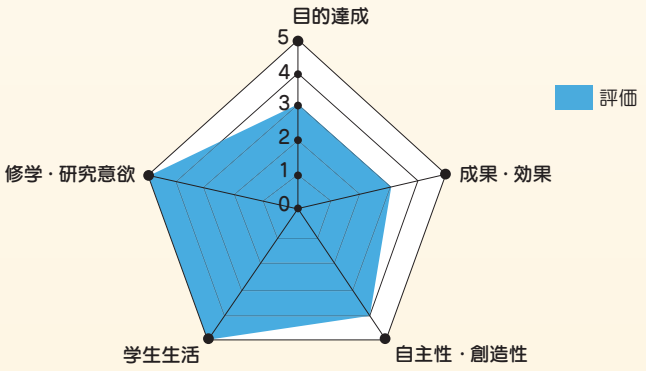


図1.「日本語イブニング・コース2012」春学期（2012年4月13日～8月10日）参加者数の推移.

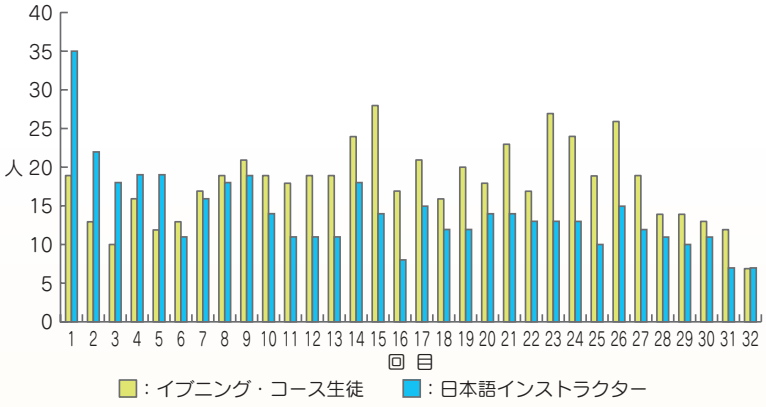


図2.「日本語イブニング・コース2012」秋学期（2012年10月12日～2013年2月15日）参加者数の推移.

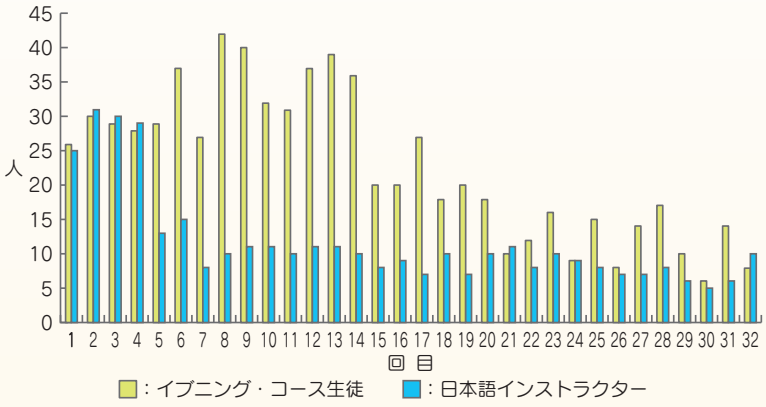
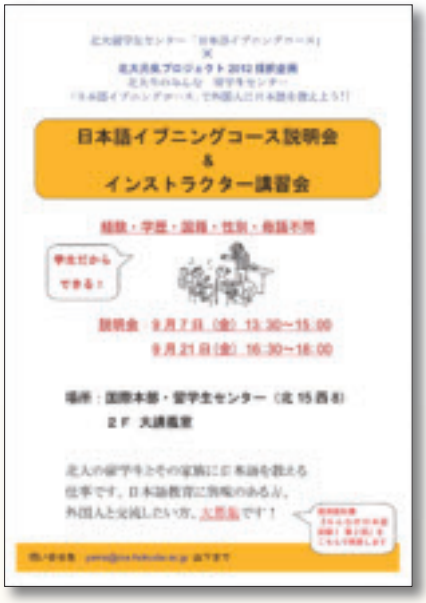


図3.「日本語イブニング･コース説明会＆インストラクター講習会」（2012年9月7日、21日開催）告知チラシ.



北大理科部　～わくわく科学教室～

代表／飯尾　真理　　環境科学院　　環境物質科学専攻　　2年

■実施の内容

①実施の流れ

（1）実験準備（1ヶ月前から）

内容：実施校との打ち合わせ･メンバー間の打ち合わせ･実施の予行練習
　　レジュメ作成・アンケートの作成

（2）実施（当日）

内容：実験準備・直前打ち合わせ・実験・生徒たちとの交流
　　アンケートの実施

（3）反省会（実施後1週間以内）

内容：反省会の実施・アンケートの評価・次回への改善点抽出

②各企画の対象と実施内容

（1）岩見沢高等養護学校訪問

対象：岩見沢高等養護学校の2年生（25名）

実施内容：調味料を用いた発電実験

（2）札幌清田高等学校訪問

対象：清田高校の2年生（120名）

実施内容：形状記憶ゲルの作製

（3）洞爺中学校訪問

対象：洞爺中学校の1～3年生（29名）

実施内容：噴火堆積物の観察・三角比を用いた天体実験・ぶんぶんごまを用いた電磁誘導実験

（4）女川・雄勝訪問

対象：宮城県雄勝郡女川町、宮城県石巻市雄勝町の小中学生（24名）

実施内容：実験スタンプラリー（6種の実験；バスボム作り・水の電気分解・調味料を用いた発電実験・光通信・ぶんぶんごまを用いた電磁誘導実験・紫キャベツを用いた染色実験）

■実施時期

2012年の実施

①10月24日（岩見沢高等養護学校訪問）

②10月26日（札幌清田高等学校訪問）

③11月9日（洞爺中学校訪問）

④11月23日～25日（女川・雄勝訪問）

■実施の評価

①小・中・高生の科学への興味・実験教室参加意欲

各実験教室おいて、生徒に「疑問→予測→実験→解決」という科学の一連の流れを体験させることができた。テーマとして設けた内容のみでなく、生徒の疑問にその場で答えることで、身の回りの科学の面白さも伝えることも実施。その結果、岩見沢高等養護学校、洞爺中学校、女川･雄勝の小中学生に対して実施後に行ったアンケートの結果からは、ほぼ全員が科学への興味・関心が上昇したことが解った。よって、小・中・高生に実験を通じて科学の面白さを実感してもらうことに成功したと考えられる。一方、昨年度に引き続き実施した洞爺中学校では、実験教室を楽しみにしてくれていた生徒が多く見受けられた。生徒の反応及びアンケートの結果を照らし合わせると、継続して実験教室を開催することで科学への興味を持続することができると考えられる。以上のことから、実験教室を通して科学の楽しさを伝える必要性と私たちの活動の妥当性を実感した。

②生徒の進路イメージの明確化

洞爺中学校での実施の際には生徒との交流時間を設け、大学生と進路について語る場を提供した。中には北大入学を目指す生徒もおり、高校や大学での学びについて相談を受けた。私たちの実体験を語ったところ、高校や大学生活をイメージするきっかけとなったようである。北大生である私たちと話すことで、さらに北大への入学を目指したくなったと語ってくれた。高校卒業の先にある大学生活の楽しさを語ることにより、高校での学習意欲も向上したとの声もあった。以上のことから、実験教室を用いた交流の場において、進路について具体的にイメージしたり、勉強に意欲的に取り組んだりするきっかけを生徒に与える事ができたと考えられる。

③活動を通した私たちの成長

全ての活動において社会人基礎力を身に着けることができたと考えられる。企画→計画→実行の流れを最初から最後まで自分たちで作り上げることができた。昨年度は一から作り上げたイベントが1回であったが、今回は4回の実施が可能であった。理科部の立ち上げ当初から得た力によるものと考えられる。段階に応じて獲得した力を以下に示す。

実験準備…先生方、NPO法人の方とメールや電話での交渉もしくは直接お話しする機会を設け、打ち合わせを行った。対象学年と人数・実験内容・会場の状況等に応じて企画をアレンジする事で柔軟性や創造力を培った。先方との日程・内容の調整→情報を全体にフィードバック→今後の方針決定、というサイクルで活動を推し進めることで働きかけ力・課題発見力・計画力・状況把握力を向上。この様にイベントを主催することで主体性を養った。

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
大谷　猛亮	理学院	自然史科学専攻	2
塩谷　和樹	理学院	地球史科学専攻	2
玉置　瞳美	総合化学院	総合化学専攻	2
濱本　　昴	理学院	宇宙理学専攻	2
石川　雅也	環境科学院	環境物質科学専攻	1
大森　　徹	環境科学院	環境物質科学専攻	1
岡崎　春香	生命科学院	生命科学専攻	1
長田　詩織	理学院	自然史科学専攻	1
高山　克也	総合化学院	総合科学専攻	1
土井健太郎	総合化学院	総合科学専攻	1
広田　沙紀	環境科学院	環境起学専攻	1
松本　拓弥	環境科学院	環境物質科学専攻	1
溝渕　皓大	環境科学院	環境物質科学専攻	1
三塚麻里奈	環境科学院	環境物質科学専攻	1
佐藤　　幸	法学部	法学科	4

実施…実験・説明を実際に行う中で自分たちに足りないものを見つけ出し、それを改善していった。昨年度は8種類であった実験レパートリーも、今年は14種類にまで増やし、実験および復習レジュメの内容も対象に合わせて独自のアレンジを加えた。このような経験を通じ、課題発見力や発信力、創造力を培った。

反省会…活動後一週間以内に必ず反省会を開催し、アンケートの結果や生徒の反応をもとにしてメンバー全員で問題点の抽出・改善策の模索を行った。その結果、回を重ねるごとに計画・活動が円滑に進められた。また私たち自身もメンバーとのディスカッションの中で、発信力や傾聴力、思考の柔軟性などを身に着けていった。

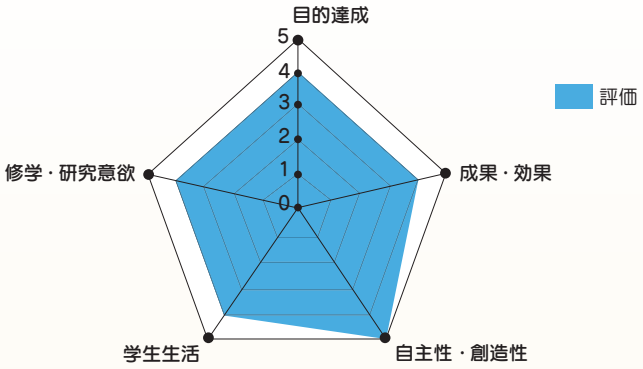
これらに加えて、昨年度構築した基盤や人脈を維持することが可能であった。継続して実施させていただくことで、実施先の先生方から活動に対する信頼を獲得した。来年度も実験教室を実施してほしいとの声があり、私たちも準備を進めている段階である。

以上のことから、社会人基礎力を身に着けることができ、生徒と共に成長できたと考えられる。来年度以降も先生方とのご縁を大切にし、ご要望にお応えしながら実験教室を行っていきたい。

その他（希望・反省等）

清田高校での実施の際には、実験時間及び生徒との交流時間を十分に確保することができなかった。次回実施する際には、実験手順等で削る部分等を十分に検討したい。一方、遠隔地での実験教室の開催においては、毒劇物を持ち運びできないという問題点が浮上した。来年度道内遠隔地等で実施する際は、実験内容を十分に検討していきたい。

実施評価



岩見沢高等養護学校

洞爺中学校

東北被災地訪問

僕らの歩行祭　～夜のピクニック～

代表／大木　研人　　工学部　　環境社会工学科　　3年

■実施の内容

2012年6月24日　参加者説明会、交流会
7月7日～8日　僕らの歩行祭本番

参加者説明会、交流会では、参加者に当日の予定や準備物、班構成などを説明し、当日の注意点や禁止事項などを促した。その後の交流会では、班事に分かれ当日に持って歩く「のぼり」の作成をした。のぼりを作成する中で、お互いに自己紹介をしたり、班長を決めてもらったりしてコミュニケーションを取ってもらった。

本番は、7月7日の朝8時に円山公園に集合した。点呼、当日の体調などを確認して開会式を行った。開会式の中で、もう一度当日の注意点や禁止事項を確認した。9時に円山公園を出発。1時間に10分程度の休憩を挟みながら、往路のゴールである朝里中央公園を目指す。朝里中央公園では、夕食を取りながら1時間程休憩。復路に備える。19時頃、朝里中央公園を出発し北海道大学を目指す。8日の10時には参加者全員がゴールし、閉会式をして解散した。

■実施時期

2012年5月　　新歓、運営メンバー説明会
6月24日　　参加者説明会、交流会
7月7日～8日　　僕らの歩行祭本番
12月20日　　元気プロジェクト報告会

■実施の評価

この企画の目的は、3つである。「北海道の多くの学生が新たに深くつながる事」、「大きな事を成し遂げる達成感を味わう事」、「自分を見つめ直すきっかけ」の3点である。

1　70人を越える参加者や、およそ20人の運営スタッフが参加した。この企画では、多種多様な生活を送っている大学生たちが集まった。ひたすら歩き続ける中で、会話を交わし、時には励まし合うなかで普通に生活していては得る事のできない絆が生まれた。学校やサークルの垣根を越えた新しい繋がりが生まれた事で、北海道の多くの学生の交流を促す事ができた。

2　この企画は、およそ80kmの距離を2日間で歩ききる。実際に歩くと、途方もない距離だという事に気づく。それでも参加者は歩ききる事ができた。大きな達成感を得たことは言うまでもない。参加者の中には、半年前に病気を患い、入院していた者がいた。その参加者は、この企画を知ってから、80km歩ききる事が目標になっていたと話す。そして、歩ききって病気と決着をつけたいと言っていた。歩ききる事で達成感を感じ、その後の生活の活力に与える事ができた。

3　現在、私は就職活動をしている。そこで、とても大事な事を知った。それは、自己を深く掘り下げること。いわ

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科・専攻名	学年
気仙　　誠	工学部	環境社会工学科	3
中村　晴日	教育学部	教育学科	3
三浦　正大	経済学部	経営学科	3
牧野　杏美	経済学部	経営学科	3
岡田進太郎	工学部	環境社会工学科	3
久保　大地	経済学部	経済学科	3
大塚　慎也	医学部	医学科	3
奥村明日希	（藤女子大学）		3
中村かれん	（酪農学園大学）		3
大島　悠揮	工学部	環境社会工学科	3
坂　友香理	（北海道教育大学）		1
高橋　　栞	（小樽商科大学）		1
土畠　啓夢	（小樽商科大学）		2
上西麻里沙	（北海道教育大学）		1
塩澤佳奈子	水産学部		1
対馬　杏衣	（小樽商科大学）		4
近藤　愛奈	（藤女子大学）		4
森　　勇太	（札幌医科大学）		5

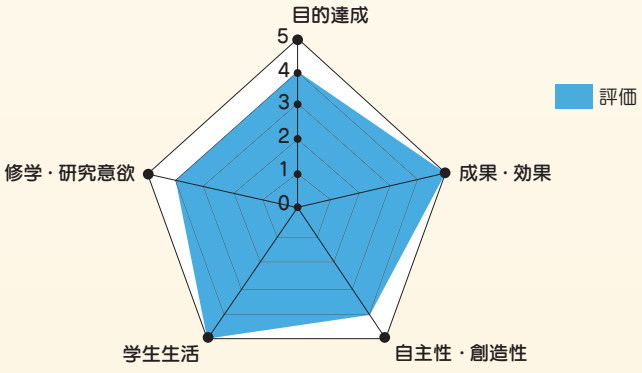
ゆる自己分析である。自己を見つめ直す事で、自分が本当にやりたい事が見えてきて、これから何をして行けば良いのかが分かってくる。これは就職活動に限らず、とても重要な事であると感じた。この自己分析をする絶好の機会がこの企画であると思う。歩く事以外にできる事は、話す事か、自分を見つめ直す事である。この企画をきっかけに今後の学生生活に弾みをつけて欲しいと思う。

その他（希望・反省等）

この企画の目的は、上記の3点であったがこれは参加者のための目的であった。しかし、この企画の本番最中にこの企画に参加していない人にも影響を与えている事が分かった。Facebookや新聞に取り上げられ事をきっかけに元気をもらった人がいた。また、道中では車から応援してくれた子供や、病院の中から手を振って応援してくれる人たちがいた。参加者以外の人々にも元気や笑顔を与える事のできることに、この企画の面白さを感じた。

北大元気プロジェクトからの支援希望物品				
①北大元気プロジェクトからの支援（上限50万円）	②自己負担			総事業規模（①+②）
92,500			20,500	113,000
支援希望物品等詳細				
物品名等	数量	単価（円）	金額（円）	備　考
事前説明会での会場費	1	15,000	15,000	
のぼり作成費用	10	550	5,500	
救急セット	1	7,000	7,000	
広告費（主に印刷費）	1	10,000	10,000	
当日のしおり（印刷費）	100	10,000	10,000	
その他（ノートやゴミ袋など）	1	5,000	5,000	
ガソリン代	1	10,000	10,000	車4台での各2,500円
Tシャツ	20	1,500	30,000	
小　計　①			92,500	
自己負担の詳細				
物品名等	数量	単価（円）	金額（円）	備　考
当日の食費	1	78,000	78,000	1人当たり680円（各食事ごとに300円深夜に180円）
当日の飲料	1	60,000	60,000	
当日の打ち上げ費用	1	67,000	67,000	30人分を想定
小　計　②			205,000	ひとりあたり1,950円
総事業規模　③=①+②			297,500	

実施評価



北海道学生think tank

代表／渡邉　理子　　法学部　　法学課程　　3年

実施の内容

本プロジェクトの目的は、①学生が議論し相互に学びあう場を設け②北大内外の学生の幅広い交流を促進することである。大学では大教室で講義を受け身で聞くことが多く、ゼミ等がなければ他の学生が何をどう感じているのか知る機会はあまりない。しかし、本プロジェクトで行う少人数のグループワークにおいて他学部の意見を聞き相対化することで、新たな視点を持ち、創造性や思考能力、コミュニケーション能力を高めることができる。また、北大では1年生の教養時には他学部との交流があるものの、学部にあがるとサークル等でしか関わる機会がない。しかし、現実の社会問題は多岐にわたる分野が複雑に絡み合っており、専門性の異なる学生らが協働する必要がある。そこで、北大内外の学生のつながりをつくり将来活用できる人脈を提供する。

具体的には道内の延べ9大学（北大、天使、北海、札医、旭医、北医、北星、国際ほか）から各回40名ほど集め「医と法の視点からみる出生前診断」「死生観」「自殺」というテーマのもと、グループワークを行った。グループは参加者（法、文、経、医、工、農、薬、理、その他）の専門を考慮してバランスよく配置した。議論にあたって必要な知識や情報は運営側が開催時期の3ヶ月前から情報を収集し、資料配布やプレゼンのかたちで提供した。情報の収集にあたっては北大の諸先生方にお伺いしご協力いただいたこともあった。この場をお借りして感謝申し上げる。

実施時期

第1回　5月12日「医と法の視点からみる出生前診断」
第2回　6月28日「死生観」
第3回　10月27日「自殺」

実施の評価

元気プロジェクトに採択されていることで各学部にポスターを貼っていただいたり、学部棟の教室をお貸しいただいたりと多方面でご協力いただくことができた。その甲斐あってか予想以上に多くの学部・大学から参加者を集めることができた。

テーマはいずれもデリケートな部分を含むものであったが、参加者の方のご協力でなごやかな雰囲気のなか建設的な議論をすることができた。事後アンケートでの満足度も9割が「満足」と高い評価を得ることができ、全員が「新たな気づきを得ることができた」と回答したのも大きな成果であったといえる。また、これを機に進学を考えたり他分野への興味を持ったりする参加者が多く見られた。アンケートにも「様々な専門を活かして発言していて刺激になった」、「様々な考えを持つ人たちと話せて考えが広がった」という声が多くあった。このことから、“異なる専門性をもつ学生が議論し深め合うことで、普段の学生生活にはない知的な刺激を得る”という当初の目的を果たすことができたのではないかと思う。

企画としてもグループワークの内容について専門の異なる学生同士の議論がしやすくなるように配慮するとともに、第3回ではコンサルで用いられる問題解決スキームを組み入れるなど斬新な手法をとった。参加者のなかにはこうしたグループワークが初めての方や逆にやり慣れている方の両方がいた。真新しいやり方をすることで双方にとって興味深いワークになったことがアンケート結果からわかった。論理的に考えるという点で苦労されていたが、試行錯誤を繰り返し結果的に多角的に考えられた結論を発表することができていた。各回とも臆することなく自分の考えを述べる参加者が多く活発な会を開催することができた。また、運営や参加者には他にも団体活動等を行ってい

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
菅野優太郎	法学部	法学課程	3
大木　直都	法学部	法学課程	3
三本竹　寛	法学部	法学課程	3
樋口　朝霞	医学部	看護学科	3
鈴木　美沙	（旭川医科大学医学部医学科）		4

る者がおり、イベント情報の共有の時間をとることによって学生の活動の拡大に資することができた。ただ、本プロジェクトの3回の開催にあたり告知活動をするなかで興味はあるものの参加には至らない北大生が多いこともわかった。今後はこうした学生にいかに参加してもらうかが課題となる。

■その他（希望・反省等）

〈反省〉

・企画内容について

内容を濃くした分タイムテーブルがきつくなってしまった。より深く議論したいという参加者の声を今後の参考にしたい。また、think tankで議論したことを次につなげる方法があればより良い。学外への発表やフィールドワークなどにつなげていくことを考えたい。

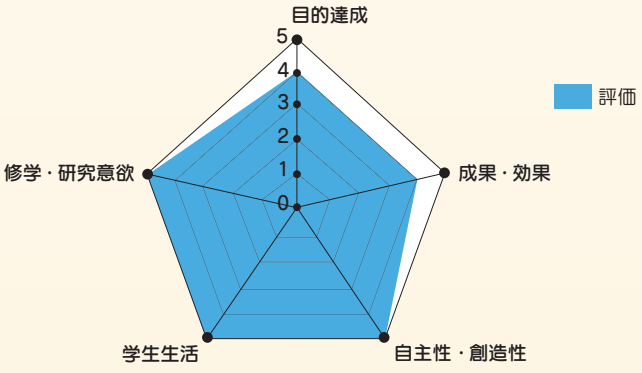
・運営について

ポスターやSNS等での告知に限界があり運営の人数を確保できず情報収集や企画段階で個々の負担が大きかった。今後、より多くの人に興味をもってもらえるよう運営・参加者の募集方法を考えたい。

〈希望〉

高等教育推進機構の教室を土日に使用できるようにしてほしい。大人数が入りプロジェクターが使用できる場所が学内に限られており、学部棟は2週間前でないと空きがわからないため開催日時が不確定になってしまう。既存の施設を有効に活用できる環境の提供を検討していただきたい。

■実施評価



北海道大学入学式前夜祭2013

代表／土橋　拓斗　　法学部　　法学課程　　3年

■実施の内容

【実施予定項目】

・企画…ビンゴ、北大生アンケート、クイズ

・参加団体…北海道大学縁、競技舞踏部、アカペラサークルNoSeRA、チアリーディング部CADENDIA

【企画について】

入学式前夜祭では、“新入生同士で仲良くなる”ことが第一目標でその目標が最も達成できるのが企画です。今年は3企画、時間にして1時間程度で準備しています。

【団体について】

北大の先輩の姿を知ってもらうことも目的の1つでのすので、今年は4団体、時間にして30分程度で準備しています。

■実施時期

2013年4月5日（金）

■実施の評価

現在、準備中です。目的として、新入生同士が仲良くなってもらう、北大の先輩の姿を知ってもらう、入学前の緊張をほぐすなどの目的がありますが、それらの目的に沿って前夜祭の内容を決めていきます。特に今年は、企画などで例年と違った形の内容が多く、よりよいものにすべく現在進行形で台本の推敲をしている最中です。

また、今年は出演団体を増やすことで、北大の先輩の多岐にわたる活躍を新入生に披露し、高校とは違う大学での取り組みを感じることができると考えられます。

それとともに、企画の内容を、新入生の皆さんが楽しめるようなものにし、お互いに交流できるような環境づくりを行い、希望に満ちた大学生活を送るためのアシストをできるようにしております。

実施後は、新入生に対しアンケートを行い、今年度の反省点を明確にし、メリットをのばし、デメリットを一つでも改善できるようにしていきたいと思います。

■その他（希望・反省等）

まだ未実施ですが、実施後の反省を踏まえ、来年度のプロジェクト（入学式前夜祭2014）でも北大元気プロジェクトにお世話になりたいと思っています。よろしくお願いします。

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
相澤　尚樹	教育学部	教育学科	3
大沼　高大	医学部	保健学科	3
大野　敦士	工学部	応用理工系	3
小林　澄都	工学部	情報エレクトロニクス学科	2
中川　卓海	水産学部	資源機能化学科	2
松盛　泰明	理学部	物理学科	2
水野　史隆	工学部	環境社会工学科	2
関戸　浩史	理学部	数学科	1
楢木　紳平	工学部	環境社会工学科	1
堀井　聡司	工学部	応用理工系	1
室谷　　稜	水産学部		1

【収支報告書】

収入の部

項目	単価	個数	計	備考
元気プロジェクト			¥500,000	
広告協賛			¥300,000	パンフレットに掲載・挟み込み
前夜祭パック			¥30,000	
入場料（100円×2000人）			¥200,000	
合計			¥1,030,000	

支出の部

部局	項目	単価	個数	計	備考
技術	パンフレット代			¥150,000	24ページ。2300部。
	イラレCS5	¥25,800	1	¥25,800	パンフレット作成に使用
	合計			¥175,800	
協賛	名刺用紙	¥398	2	¥796	
	クリアファイル			¥21,000	前夜祭パックに使用
	合計			¥21,796	
企画	賞品代	¥40,000		¥40,000	各企画賞品
	色画用紙	¥105	5	¥525	企画小道具製作用
	合計			¥40,525	
体育館	ステージ代			¥500,000	
	飲み物	¥100	7	¥700	ステージ業者へ差し入れ
	弁当	¥390	7	¥2,730	
	黒幕	¥15,000	1	¥15,000	
	合計			¥518,430	
庶務	ラインテープ	¥800	10	¥8,000	
	ごみ袋	¥398	5	¥1,990	
	雑巾	¥248	1	¥248	体育館清掃用
	布テープ	¥128	5	¥640	
	すずらんテープ	¥248	5	¥1,240	
	ライトテープ	¥198	5	¥990	
	両面テープS	¥100	20	¥2,000	
	印刷代			¥15,000	
	コピーカード	¥10,000	5	¥50,000	
	コピー用紙（B5）	¥300	5	¥1,500	
	コピー用紙（A4）	¥300	10	¥3,000	500枚入り
	厚口コピー用紙A4	¥2,000	3	¥6,000	引換券・パンフシールに使用
	レジ袋25号	¥200	3	¥600	靴袋用
	レジ袋25号	¥3,500	1	¥3,500	
	DVD	¥1,500	2	¥3,000	
	CD	¥1,000	2	¥2,000	
	チャック無ポリ袋	¥100	6	¥600	パンフシール用
	両面テープS	¥3,000	1	¥3,000	パンフシール用
	ビデオカメラ	¥40,000	1	¥40,000	
	単3電池	¥300	5	¥1,500	10本入り。無線機用
	SDカード	¥2,000	1	¥2,000	ビデオメモリー用
	合計			¥146,808	
総計				¥903,359	
収入－支出				¥126,641	

※写真は前年度のものです。

北大元気プロジェクト2012は、原則として平成25年2月までに活動を終了しますが、当プロジェクトは4月に開催するため、現在活動中です。本報告書には、イベント当日の計画等を報告しました。

北海道大学フォーミュラチーム

代表／國　拓也　　工学部　　機械知能工学科　　4年

実施の内容

平成23年12月に設計がほぼ完成し、平成23年1月より製作を開始しました。その後約5か月間車両の製作を行い、6月に車両が走行可能な状態となり、その後大会までの3か月間テスト走行を重ね、セッティングを重ねた。チーム単独でのテスト走行の他にも、北海道自動車短期大学と合同で試走会も行った。2012年度のマシンは製造工程の簡略化マシンセッティングの容易さを重点とした設計としたため、早期完成とセッティング時間の確保が可能となった。車両製作と同時に、企業へのスポンサー活動、北大祭での車両展示、工学部文化祭での車両展示のほか、今年度からの初の試みである地域の皆様へのものづくり活動の紹介のためのイベントである「サッポロ・オープンラボ」への参加、北大のサークル活動を紹介する場である「Hokudai Ambitious Fest（HAF)」へ参加など大会の参加だけにとどまらず、地域活動への積極的な参加にも取り組んだ。大会期間中は、全国各地から参加した大学の学生との意見交換など大学同士での交流にも積極的に参加をした。また、スポンサー企業様との交流を通して社会のマナーや常識なども学ぶことができた。

実施時期

主な目的である「第10回全日本学生フォーミュラ大会」は平成24年9月3日（月）～7日（金）に実施された。プロジェクトの実施期間は、平成23年10月初めから平成24年9月末までとなる。大会へ出場するために、車両製作、活動資金を集めるためのスポンサー活動、地域の方々へものづくりの楽しさを伝えるための広報活動として展示イベントへの参加や文化祭での展示などを通年で行っている。

実施の評価

当初年度の初めに立てた年間の製作計画通りに作業が進行できていたが、エンジン調整の遅延などが原因となって計画に遅れが生じてしまったことで結果的に車両完成が当初の計画よりも遅延してしまい、テスト走行の時間が当初の予定よりも短くなってしまった。

大会では、昨年と比較して大幅にテスト走行などで車両を調整することができたため、昨年と比較して大幅に走行性能が向上し高い得点を得ることができた。一方で、マーケティング戦略・企画・コスト管理へ対する得点が昨年度よりもやや減少してしまった。大会での総合成績では、昨年度の総合成績39位から大きく順位を上昇し、全82チーム中総合14位という成績を頂くことができた。しかし、今年度のチームの目標としていた総合成績10位以内を達成することができなかった。

昨年度以前は、大会への参加とその準備のみが主要な活動となっていた。今年度からは広報活動にも重点を置き、スポンサー活動の充実や地域活動への積極的な参加を行ったことにより、チームとしてのバランスの強化を図ることができた。企画・設計・製作・評価という「ものづくり」のすべてのプロセスを経験するだけでなく、スポンサーとの応対・広報活動などにも力を入れることで一つの仮想企業を経験し、社会にでて通用する人材の育成というチームの主要な目的の一つを十分に果たすことが可能となった。

以上のことから、チームの作業環境の整備や設備の充実など解決すべき課題はあるが、チームの主要な活動の目的

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
渡邉　一希	工学院	人間機械システムデザイン専攻	修士1
寺川　健	工学院	機械宇宙工学専攻	修士1
渡邊　翔太	工学部	機械知能工学科 機械情報コース	4
黒田　啓介	工学部	機械知能工学科 機械情報コース	3
亀山　頌太	工学部	機械知能工学科 機械システムコース	3
宮下　修一	工学部	機械知能工学科 機械システムコース	3
山田　海	工学部	機械知能工学科 機械情報コース	3
渡辺　祥太	工学部	機械知能工学科 機械システムコース	3
近藤　光彦	工学部	機械知能工学科 機械システムコース	2
安田　匡宏	工学部	情報エレクトロニクス学科	2
小林　晋	経済学部	経済学科	3
矢作　和臣	総合教育部 理系総合		1

をほぼ達成することができた。今後は設備の充実などを図るとともに、チームメンバーひとりひとりが活動の目的を意識し、持続可能な活動となるよう大会への参戦、スポンサー活動、広報活動といった基本的な活動の他に、チームの環境整備を行っていく予定である。

その他（希望・反省等）

平成24年度の下半期から担当者がチームを辞めてしまい、提出する書類の引き継ぎがうまくいかず、ご迷惑をおかけしてしまいました。来年度からも採択頂けましたらこのようなことが無いようチーム内で十分注意いたします。

【平成24年度北海道大学フォーミュラチーム収支内訳】

収入の部

収入内訳	収入金額
研究費	￥1,500,000
北大元気プロジェクト	￥499,700
スポンサー様支援	￥316,000
部費	￥681,000
北工会	￥142,800
雑収入	￥46,000
収入合計	￥3,185,500

支出の部

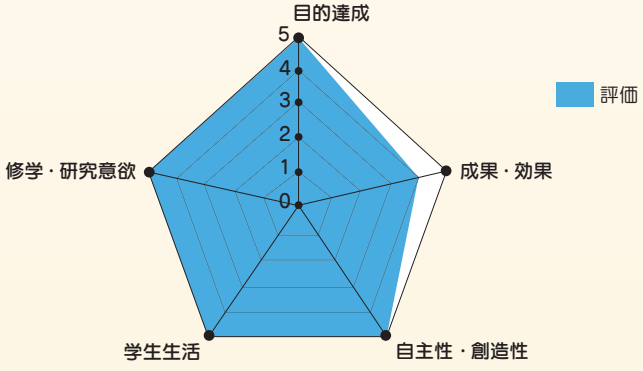
支出内訳	支出金額
エンジン	￥926,992
シャシー	￥348,456
カウル	￥148,774
マネジメント	￥175,768
工具購入費	￥105,569
消耗品購入費	￥71,382
活動遠征費	￥248,854
大会参加諸経費	￥776,007
テスト走行	￥51,440
支出合計	￥2,853,242

※剰余金は次年度へ繰越。

元気プロジェクト支援金使用内訳　予算額　￥499,700

使用内訳	使用金額
Fuel Tank	￥75,000
Go Pro HD HERO2 M/Sエディション他	￥29,451
FS用ダンパー（納品予定）	￥392,870
使用金額合計	￥497,321
元気プロジェクト予算残額（平成25年3月現在）	￥2,379

実施評価



みんなの芸術祭実行委員会 “Brio!”

代表／大山　賀世　　農学院　　環境資源学専攻　　修士1年

■実施の内容

「気軽に楽しめる芸術を楽しもう」をコンセプトに、市民から作品を集めて芸術祭を開催した。

芸術に携わっている人や、興味を持っている人は多くいるのに、なかなか気軽に芸術に関われる場所がない。そこで私たちは、「芸術をより身近に楽しめる環境を作る」ことを目指して芸術祭を開催しました。「プロ、アマチュアを問わずに、芸術に携わる人が発表できる場をつくる」「より気軽に芸術作品を見る場をつくる」「実際に製作を体験できる機会をつくる」という3点を軸に、北海道大学遠友学舎にて実施しました。

「One day～一日の物語～」というテーマのもと、ポスターによる公募と、高等学校への依頼によって、70点の作品を集めた。絵画や生け花、メディアアート、木工、写真、と多岐に渡る作品の展示、アレンジフラワー制作体験、アカペラの演奏を実施した。また、カフェを併設することで、気軽に立ち寄れる雰囲気を作り出すよう努めた。

広報活動はポスターおよびSNSによって行い、2日で180人が訪れた。

■実施時期

2012年11月24日～25日

■実施の評価

今回は3回目の開催ということで、前回までの作品出展者、来場者などからの作品が多く集まった。これまでの開催が、多くのつながりをつくってきたということ、芸術作品を発表する場を求めている人が多くいるということを実感した。しかし、より多くの人にとって気軽に作品を発表して楽しめる芸術祭にするためには、既存のつながりだけでなく、出展者の幅を広げていくことが重要である。

来場者からは「気軽に立ち寄って素敵な作品を観ることができて楽しかった」との声を多く聴くことができた。また、メディアアートや木工作品など、あまり触れる機会のない作品を展示したことで来場者にとっては、「新鮮さ」や「発見」を楽しんでもらえたように思う。しかし、来場者の多くが出展者の知人と偶然立ち寄った人にとどまってしまった。ポスターとSNSによる広報を行ったが、これらの手段だけでは告知できる範囲が狭いということを実感した。今後は、メディアを積極的に利用して広報活動をしていく必要があると感じた。また、雪が降るなかで遠友学舎での開催であったため、一般市民の方にとっては来にくいものになってしまったと思われる。時期と場所に関しても、検討していく必要がある。

本芸術祭では、出展者は高校生から70代、来場者は幼稚園児からお年寄りまでと幅広く、また体験コーナーを通して普段接することのできない世代の人と関わることができた。芸術を楽しむ場としてだけでなく、幅広い世代が交流することができる場となったことも、有意義であったと考える。

今後は出展者を拡大し、また広報活動をより効果的に実施することで、より多くの人が「気軽に楽しめる」芸術祭を目指していきたい。

■その他（希望・反省等）

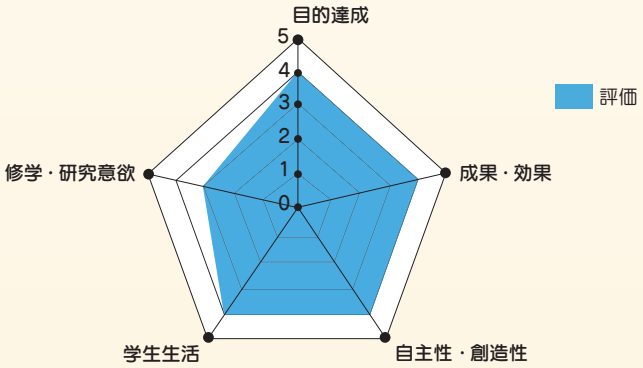
実施場所の決定が遅くなってしまい、希望する時期に開催することができなかったことを反省しています。

学生支援課のみなさま、大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
長嶋　沙希	農学院	生物資源科学専攻	修士1
長田　詩織	理学院	自然史科学専攻	修士1
入江　佳澄	文学部	人文科学科	4
渡辺　健人	工学部	機械知能工学科	3
三本木咲花	医学部	保健学科	3

■実施評価



ロボットフィールドプロデュース2012

代表／帆足　勇之　　工学部　　機械知能工学科　　2年

実施の内容

ロボット教室等の実施（計3回）

・ロボットバイアスロン教室

10/14　10：00～17：00　学術交流会館第一会議室
参加：小学校3～6年生　16名（応募24件から抽選）
参加費無料
内容：ヴィストン社の『ビュートレーサー』キットをベースに独自にセンサーを追加し、ライントレース（フィールドに書かれた線上を走る）機能と障害物を検出する機能を持ったロボットの制作、及びそのプログラムを行うロボットプログラミング教室を開催した。また、製作したロボットによる競技も行った。

・第二回ロボット相撲教室

11/10　10：00～16：00　情報科学研究科棟A21教室
参加：幼稚園～小学校3年生　24組（保護者同伴）
（約40組より抽選、26組を選出。2組当日欠席）
参加費：100円（添付資料参照）
内容：昨年度も好評であった、有線のリモコンで動く「相撲ロボット」を作る親子での工作教室、及び工作物による競技会の開催。今年度は山崎教育システム社の『プチロボ』キットをベースとして採用する等、参加者の負担軽減に関する見直しを行った。

・Arduino電子工作教室

1/12　10：00～18：00　学術交流会館第三会議室
参加：中学生、大学生　13名（14名応募、当日1名欠席）
参加費：1000円（添付資料参照）
内容：Arduinoマイコンの基礎に関する講習。ロボットの頭脳となるマイコンの学習のため、『Arduino』と呼ばれるオープンな開発環境を用い、各種センサーなどを使用したプログラミング教室を開催した（教室には『Arduino leonard』と呼ばれる種類のマイコンボードを使用した）。

参加者が家に帰った後も引き続き学習を続けられるように教材・カリキュラムを吟味した他、オリジナルのテキストを作成し配布した。また、ブログを開設し、教室の補足、作例の公開等のサポートを行う計画である。

実施時期

ロボットバイアスロン教室　2012年10月14日
第二回ロボット相撲教室　2012年11月10日
Arduino電子工作教室　2013年　1月12日

実施の評価

・第一回（ロボットバイアスロン教室）について

昨年度も類似のプログラミングの基礎に関する教室を行ったが、昨年度使用した教材（ROBO Designer）が生産中止となったこと、高価なことを鑑み、使用教材を変更した。また、教室で扱うプログラムの内容も見直した。また、参加者の理解を助けるため、ワークシートも作成して配布した。

教室でのプログラミングの際にPCを使用したが、レンタルを考慮した他参加者に持参も呼びかけたものの集まらず、最終的にメンバーの私物PCを貸し出して用いた。

応募が想定していた定員を上回ったため、抽選を行った。参加した小学生はほぼ全員がプログラミングなどは未経験であったが、殆ど無事にロボットを完成させることが出来た。教室後のアンケートでの評価も良好であったが、内容が詰め込みすぎである等の問題も見られた。

・第二回（第二回ロボット相撲教室）について

計画段階では昨年度のロボット相撲教室から一歩進めたホバークラフトロボットを製作する教室を考えていたものの、試作した際の要求される工作の精度・難易度や、作った後の楽しさなども考え、昨年度の内容を引き継ぐこととした。

応募件数は第一回に比べても多く、予備部品を割いて定員を2名増やしたが、最終的に抽選を行わざるをえなかった。

教室後のアンケートでは楽しかったという意見が多く、保護者向けのアンケートでは「時間が丁度良い」という意見もあり、カリキュラムの改善による効果がみられた。ロボットづくりの際に親子でのコミュニケーションも見られた他、他大学の団体から教室の見学も訪れた。

・第三回（Arduino電子工作教室）について

様々な制約に悩まされた教室であった。これまでの教室のような学習教材ではなく、大学などでも通用するような「ロボット」の基礎となる部分を教室で行うことで、教わる側の将来的な発展性につながるだけでなく、教える側のモチベーションや技術力をも向上させようという狙いに基づくものであった。

それに伴い、対象層を従来の中高校生に大学生を加え、拡大した。

しかし、予算や準備の問題から計画していた「ロボット」を教室で作ることは難しく、また、参加者への負担等の考慮から、当初は2日日程の計画を短縮し、内容も大幅な削減・見直しを行わざるを得なくなった。

対象層を拡大したことでイベントの広報の手段についても見直しを迫られた。結果として、当初16名程度の定員を想定していたところ14名の応募しか得られなかった。マイコンの使用等を経験したことのある参加者も数名いた。

開催後のアンケートでは教室の内容について満足という解答が得られ、より発展的な内容を望む声も大きかったものの、「教室の雰囲気が暗い」、「内容が難しく感じられた」といった改善すべき点に関する意見も見られた。

その他（希望・反省等）

・機材に関して、元気プロジェクト保管物のレンタルが有効活用できるようにすべきだった（Webカメラ等を借用し、教室の際に使用した）。また、プログラミング教室に使用したノートPCについて、構成員からの貸出に依存していたため、何らかの改善策を考えたい。
・教室に対する保険料について元気プロジェクト予算を利用することが出来ず、参加者に対して負担を求める形となってしまった。
・Arduino教室の予算使用に関して、圧縮すべき点が見られた。また、広報等における不手際、対象年齢層のスケジュールに対するリサーチ不足から当初想定した定員を下回る応募件数であった。
・小学生向けイベントについては、昨年度同様定員を上回る応募のため抽選となってしまったが、現在の体制ではスタッフの人数制約等の都合から定員の増加は難しい。運営面での見直しが必要である。
・以上の反省点の一部に対する解決策として、次年度については他団体との連携を模索する余地があるように思えた。

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
高棹　大輔	文学部	人文科学科	2
児玉　　匠	工学部	応用理工系学科	2
山岡　明弘	工学部	応用理工系学科	2
松田宗一郎	工学部	情報エレクトロニクス学科	3
石垣　一樹	工学部	機械知能工学科	3
葛西　紘貴	工学部	情報エレクトロニクス学科	3
梶原　孝則	工学部	機械知能工学科	3
田中聡一郎	工学部	機械知能工学科	3
古谷圭一郎	工学部	機械知能工学科	4
山上　晃平	工学部	情報エレクトロニクス学科	修士1

収支報告

・第二回ロボット相撲教室

収入

項目	一人あたり	数	金額（円）	備考
参加費	100	24	2400	当日参加者24名分
計			2400	

支出

項目	単価	個数	金額（円）	備考
保険料	1000	1	1000	
交通費	1300	1	1300	保険事務所まで
印刷費			100	ビラ・プリント等印刷代
計			2400	
収支合計			0	

・Arduino電子工作教室

収入

項目	一人あたり	数	金額（円）	備考
参加費	1000	13	13000	当日参加者13名分
計			13000	

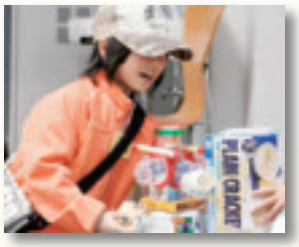
支出

項目	単価	個数	金額（円）	備考
保険料	1000	1	1000	
USBメモリ代	240	17	4080	
部品ケース代	105	16	1680	
教材部品代（圧電ブザー）	105	19	1995	調達漏れのため
計			8755	
収支合計			4245	次年度へ繰越

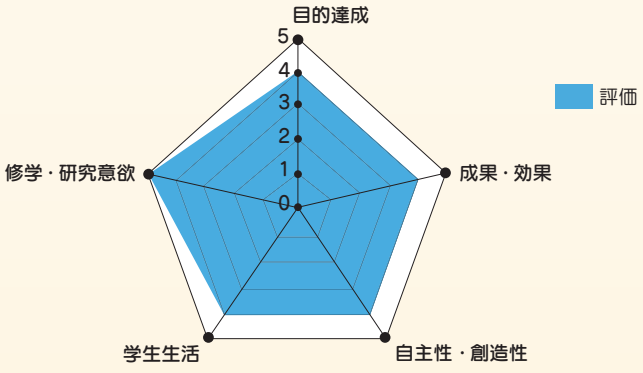
ロボットバイアスロン教室

Arduino電子工作教室

第二回ロボット相撲教室



実施評価



World Music Festival In Hokudai

代表／野口　将輝　　国際広報メディア・観光学院　　国際広報メディア専攻　　修士1年

実施の内容

言語の壁を超えて、音楽という文化を一緒に楽しむことを軸に、北大の留学生と日本人学生を中心としてコンサートを開催。コンサートや、それまでの一連の過程も含め、北海道大学を両者のより活発な交流が行われる様なキャンパスにすることを目的とし、目的達成のため国際交流PARTY、コンサートを企画した。

12月のコンサート実施まで、5月以降4度に渡る国際交流PARTYを主催。のべ800人以上（平均200名）の留学生・日本人学生を動員した。会場では世界各国の曲がBGMとして流れ、また留学生による楽曲披露、伝統舞踊、日本人学生と一緒になりYOSAKOIソーラン等を踊るなど、両者の積極的な交流を促した。

10月には参加チームを決定し、留学生と日本人学生がひとつのチームとなり、札幌市教育文化会館大ホールでの発表を目標に、歌や踊り、楽器などを2ヶ月間に渡り練習し、当日に至る。

コンサート本番であるHOKUDAI World Music Festivalでは、出演チーム11チーム、出演者160名、25カ国以上の留学生が出演し、ルーマニア伝統舞踊、韓国伝統音楽ウッタリ、アフリカ打楽器、中国古典舞踊、インドネシア伝統舞踊、ブラジルサンバ、ブルーグラスバンド、KPOPダンス、コンテンポラリーダンス、YOSAKOIを日本人学生と一緒になり披露した。

来場者は留学生の友人、日本人学生、大学教授を始めとし、市民も多く来場頂き600名以上の入場者を集め、大きな成功を収めた。

実施時期

2012年　6／15　北大最強のInternational Party
　　8／3　北大最強のInternational Night　ジンパ
　　9／5　北大最強のInternational Potluck Party
　　11／16　北大最強のInternational Culture Party
　　12／16　HOKUDAI World Music Festival

実施の評価

企画初年度でありながら、当初の目標通り、多くの留学生と日本人学生が交流PARTYを始め、コンサート出演、コンサートの観客として来場いただき、かつ札幌最大級の会場である札幌市教育文化会館を多数の来場者で埋めることができたことは、誇りに感じている。

留学生の参加については、10月から北海道大学に入学しているHUSTEPや日本語研究生の大多数の学生が、積極的にこのプロジェクトに参加しており、この取り組みをきっかけに、充実した留学生活をスタートできた。コンサート本番後のアンケート結果からも、4度の交流PARTYに複数回参加し、日本人学生、留学生問わず両者が新たな友人を作ることが出来たと回答した学生が多数おり、また出演者に至っては二ヶ月間に渡る練習期間において、通常の学生生活では得られない、濃密な人間関係を構築できたようで、今後も継続的なプロジェクトの実施や、第二回の開催を期待された。この結果から、当初の目的を十分に達成できたものと考えている。

またコンサート後、このプロジェクトを超えて参加チーム内で日常的な付き合いが起こっており、チーム内で飲み会を開いたり、留学生が、踊りを教えてくれたYOSAKOIソーラン北海道大学“縁”の日本人メンバーに対してお礼のパーティーを開いたりするなど新た継続的な動きが見られる。特に、中国古典舞踊チームは中国駐札幌総領事館の旧正月パーティーに招待を受け演舞を披露するなど、新たな展開が生まれているのは、大変喜ばしく思う。

前述の様に、初年度でありながら大規模なプロジェクトとなったことから、資金面やスタッフのマネジメント、当日の動きなどでは、至らない点も見受けられたものの、多くの方にご協力頂き、無事やり遂げることができた。次回以降は、第一回の経験や認知度、資産などもあることから、よりよい形での開催ができると確信している。このプロジェクトの今後に期待頂きたい。

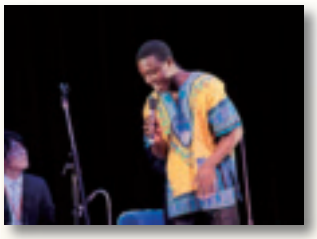
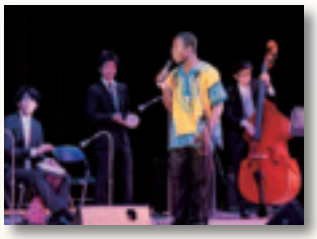
スタッフ集合写真

構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
余　　江	国際広報メディア・観光学院	国際広報メディア専攻	修士1
谷　　大輔	国際広報メディア・観光学院	国際広報メディア専攻	修士1
卜部　有記	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
出口紗也佳	国際広報メディア・観光学院	観光創造専攻	修士1
牧野隆太郎	国際広報メディア・観光学院	国際広報メディア専攻	修士1
羽賀　尚也	国際広報メディア・観光学院	国際広報メディア専攻	修士1
中野　弘貴	経済学研究科	現代経済経営専攻	修士1
三塚麻里菜	環境科学院	環境物質科学専攻	修士1
篠原　涼子	経済学部	経営学科	4
金澤　美和	法学部	法学課程	4
安藤　裕樹	経済学部	経営学科	4
逢坂美有紀	経済学部	経済学科	2
水野　景海	工学部	情報エレクトロニクス学科	4
Peng Pheng Tan	経済学研究科	現代経済経営専攻	修士2
小野寺大輝	工学部	情報エレクトロニクス学科	2
竹内　朝海	経済学部	経営学科	2
成影　沙紀	総合教育部理系		1
上鹿度里実	法学部		1

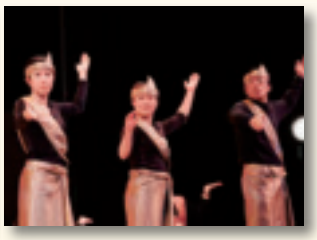
練習風景　中国古典舞踊チーム

コンサート本番 ルーマニア伝統舞踊

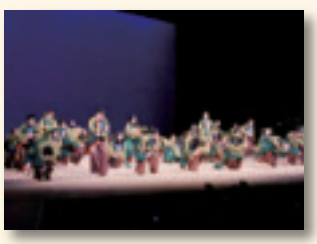



コンサート本番 アフリカ打楽器

コンサート本番 中国古典舞踊チーム



コンサート本番 インドネシア伝統舞踊チーム



コンサート本番　YOSAKOIソーラン北海道大学“縁”合同演舞

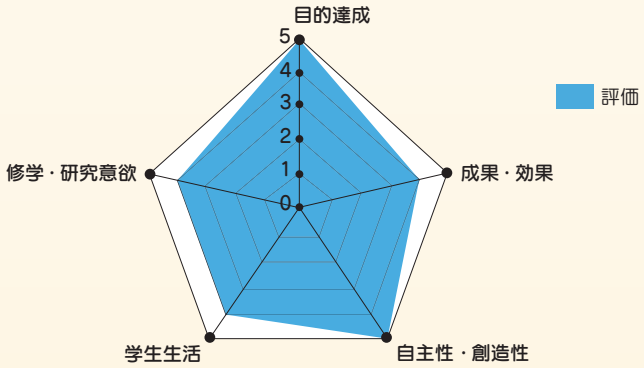
当日のMC

11／16北大最強のInternational Culture Party当日スタッフ

11／16北大最強のInternational Culture Party参加者

12／16 HOKUDAI World Music Festivalコンサート終了後
スタッフ及び出演者集合写真

実施評価



北大カフェプロジェクト

代表／久保田早穂　経済学部　経営学科　2年

実施の内容

・**2012年5月8日「新歓カフェ」（80杯）**
新メンバー歓迎活動の一環として、北部食堂の一部を貸し切って開催した。約60名が参加し、約半分が加入した。

・**2012年6月7日～10日「北大祭カフェ」（1766杯）**
北大祭の開催に合わせ、博物館のウッドデッキにてオープンカフェを開催。北大アカペラサークルNoSeRAさん、北大ブルーグラス研究会さん、北大アイリッシュサークルさんを招いての野外コンサートも行い、多くの人で賑わった。

・**2012年7月22日「第2回SYCカフェ」（201杯）**
震災支援活動をしている札幌の学生団体の合同イベント「Sapporo Youth Conference for 3.11」にカフェを併設した。参加者は飲み物を片手に、各団体の活動の検討会や、一般の人を交えたディスカッションを行った。

・**2012年8月5日「オープンキャンパスカフェ」（262杯）**
オープンキャンパスに訪れた受験生とその保護者を対象に、2か所同時開催でカフェを行った。受験相談や、現役北大生との交流ができたと好評をいただいた。

・**2012年8月26日「北海道マラソン応援カフェ」（61杯）**
北海道マラソンの開催に合わせ、応援に来た人の休憩と交流の場としてカフェを開催。給水ボランティアの方や一般市民の方にご利用いただいた。

・**2012年9月8日「エルプラまつりカフェ」（120杯）**
札幌エルプラザで開催されるエルプラまつりにコミュニティ・カフェを出店した。小学生カフェ実行委員会やパン屋とのコラボが実現した。

・**2012年9月29日～30日「photo café～フォトでつなぐココロ～」（197杯）**
北大写真部との初のコラボカフェとして、遠友学舎で開催した。普段写真展に来る機会が無かった人が気軽に立ち寄れる空間を演出した。

・**2012年10月6日～7日「サステナカフェ」（190杯）**
サステナビリティ・ウィークに合わせて、学術交流会館前で開催。イベントの合間の休憩や、学生との交流の場として好評をいただいた。

・**2012年10月25日～28日「クラークシアターカフェ」（221杯）**
北大映画館プロジェクトさんのクラークシアター2012のサブ会場に出店した。ショートフィルムを鑑賞しながら一息つける空間として好評いただいた。

・**2012年11月4日～5日「銀杏並木カフェ」（903杯）**
銀杏並木の歩行者天国の日に合わせて開催。建築学科の有志の学生がレイアウトをプロデュースし、日が暮れてからは秋まつり実行委員会による銀杏並木のライトアップが行われた。北大ブルーグラス研究会さん、北大アカペラサークルNoSeRAさん、北大合唱団さんによる野外コンサートも開催され、北大の秋が感じられると好評いただいた。

・**2012年11月17日「第3回SYCカフェ」（78杯）**
7月の第2回に引き続き、第3回SYC for 3.11にカフェを出店。SYCのイベントブースの他に、交流や休憩ができるスペースとして設置し好評をいただいた。

・**2013年2月16日～17日「かまくらカフェ」（188杯）**
北大の冬を楽しんでもらうことを目的に、理学部ローンで開催した。イベントは来場者の方と一緒にかまくらをつくるところから始まり、完成後はかまくらの中で温かい飲み物を楽しんだ。

・**2013年3月2日～3日「卒論ポスター発表会カフェ」（実施予定）**
様々な学部の4年生が、市民の方や在学生に向けて、自分の卒論をポスター形式でわかりやすく発表するというイベントにカフェを併設。気軽に立ち寄れる空間を演出する。

・**2013年3月16日～17日「お宝カフェ」（実施予定）**
北大総合博物館で開催される「博物館まつり」内の企画である「お宝展」にカフェを併設。ほっと一息つきながら、地球の歴史に想いを馳せることができる空間を提供する予定。

実施時期

2012年4月～2013年3月

実施の評価

北大カフェプロジェクトはコミュニケーションスペースとしてのカフェを開催することで、「人と人を繋ぐこと」を目的としたプロジェクトである。今年度開催した計14回のカフェ（実施予定含む）を通して、プロジェクトメンバーと訪れた人との交流はもちろん、運営に関わった他の団体と訪問者を繋いだり、団体同士や訪問者同士の新たな出会いも生まれた。

夏の「北大祭カフェ」や、秋の「銀杏並木カフェ」、冬の「かまくらカフェ」といった季節のカフェにおいては、北大の四季をより多くの方に楽しんでいただくと共に、学外の方がカフェに立ち寄ることで、市民・学生・観光客といった垣根を越えた交流が生まれた。

本プロジェクトに参加したメンバーは、活動を通して、カフェのアイディアを出すための創造力や、そのアイディアを実現するための企画力や実行力、また企画に協力してくださる方とのやりとりの中で必要な社交性などを培う機会を得た。

観光客や市民の方にも、北大と北大の魅力を感じていただけたと感じている。北大は地域に開いた大学であるが、構内に入れるだけではなく、そこで現役の北大生と交流する機会を設けることで、北大をより身近に感じていただくことに微力ながら貢献できたのではないかと考えている。

また、昨年度に比べ今年度は構成員が倍以上に増え、カフェの同時開催や規模の大きいカフェを開催することができるようになった。また、昨年度からの知名度の上昇により、より多くの団体と新たにコラボする機会が増え、企画と交流の幅が広がった。

広報面においても、学生のフリーペーパー（GAKUWARI!!!、KITABIJIN）や、テレビの情報番組（さあ！トークだよ）に取り上げられ、より多くの方に本プロジェクトの活動を知っていただく機会に恵まれた。カフェでの交流の中でも、以前よりも「北大カフェプロジェクト」の名前を知っている人が増え、認知度の上昇が感じられた。

その他（希望・反省等）

来場者の方やコラボさせていただいた団体から、北大カフェプロジェクトの活動を継続してほしいというお声をいただいている。今後のその期待と賛同にお応えするために、現状に満足することなく精力的に活動を行っていきたい。今年はカフェを担当者ごとに決め、基本的な企画の流れをシステム化することが出来た。構成人数が増えたため、今後は議

構成員

氏名	学部・研究科名	学年
富田有紀子	教育学院	博士1
金子　由実	理学部	4
伊藤　雄輝	農学部	4
小浦　拓馬	農学部	4
飛田　英克	農学部	4
大場　　雅	文学部	3
中村　晴日	教育学部	3
岡野　友香	理学部	3
今出　悠太	工学部	3
三浦　智也	農学部	3
相野　宏貴	法学部	2
管　　快斗	農学部	2
金城　早希	経済学部	2
小松由梨香	文学部	2
坂口明日美	工学部	2
高橋　　優	文学部	2
山城　文彦	法学部	1
長船　裕樹	総合教育部理系総合	1
岡本　紅羽	（天使大学）	1
庭田　沙綾	文学部	1
森下　　航	法学部	2
野呂　雪華	経済学部	2
半澤　有希	法学部	1
十川　聡子	農学部	3
萩原　光義	工学部	2
伊東　絢子	文学部	2
相澤　優作	工学部	3
柳原千絵子	総合教育部理系総合	1
武藤まり恵	文学部	2
西村　洋亮	経済学部	1
溝口友里奈	教育学部	1
中原　真希	理学部化学科	1
武田　康美	（札幌商工会議所付属専門学校）	2
小林　貴洋	総合教育部理系総合	1
南雲亜希子	総合教育部理系総合	1
梅木　望帆	（藤女子大学）	1
神田　杏樹	（札幌市立大学デザイン学部）	1
岩本　太一	工学部	1
滝藤　杏奈	経済学部	2
チェ　ジス	文学部	3
大橋　　都	（藤女子大学）	2
前澤丞一郎	総合教育部理系総合	1
川村　航太	法学部	3
木下　奨平	工学部	2
小島　隆志	教育学部	4
鈴木　紗帆	医学部	1
古山　和希	文学部	4
清水　　昴	総合教育部理系総合	1
柳谷　祐希	（北海商科大学商学部）	1
堀田　剛士	文学部	1
加藤麻由香	法学部	1
木下　　瞳	文学部	1
馬橋　　諒	（北海学園大学工学部）	2
堀川　大介	水産学部	2

論や情報共有を効率的に行っていく必要がある。

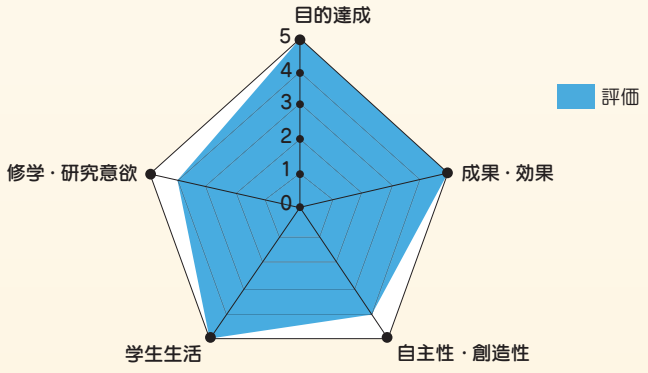
最後になりますが、5年間継続で北大元気プロジェクトに採択していただき、学生支援課の皆様にはたくさんお世話になりました。本当にありがとうございました。今年度は紙コップや木材など大型で高価な物が多く、北大元気プロジェクトのご支援のおかげで今年度も活動を続けることが出来ました。また、物品の支援だけでなく、立て看板の設置やポスターの掲示の手続きや、学内でのカフェの開催許可などにご協力を賜り、メンバー一同心から感謝しております。ありがとうございました。

資料 1．収支報告

新歓カフェ	支出	69,546
北大祭カフェ	収入	243,607
新歓カフェ	支出	115,885
第2回SYCカフェ	収入	10,361
	支出	11,814
オープンキャンパスカフェ	収入	32,636
	支出	47,980
北海道マラソン応援カフェ	収入	11,615
	支出	5,060
エルプラまつりカフェ	収入	13,250
	支出	8,750
photo café	収入	30,074
	支出	13,966
サステナカフェ	収入	30,848
	支出	8,502
クラークシアターカフェ	収入	29,978
	支出	21,274
銀杏並木カフェ	収入	124,841
	支出	54,401
第3回SYCカフェ	収入	7,467
	支出	1,193
かまくらカフェ	収入	26,496
	支出	23,215
雑費（印刷代等）	支出	4,543

収入計	561,173
支出計	386,129
収　支	175,044

実施評価



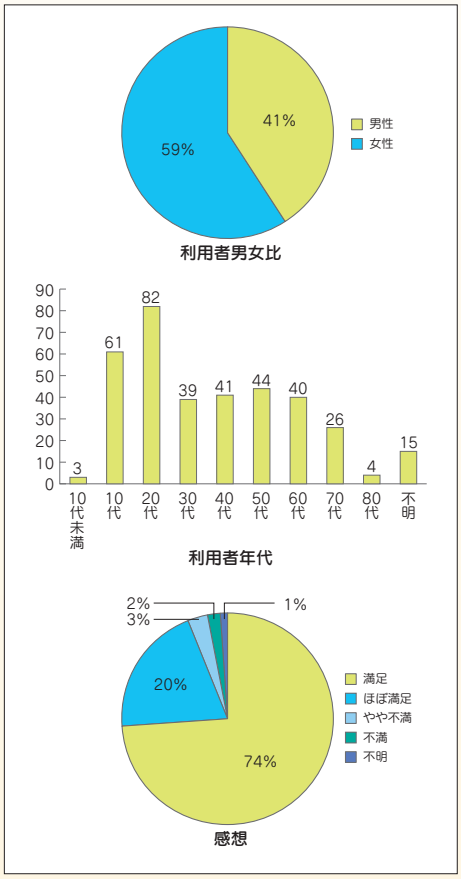
資料 2. ロゴマーク

2012年度からロゴマークを一新。デザインを学ぶ学生に作成を依頼した。
コーヒーカップをモチーフに、周りを囲むリボンがカフェから繋がる人の輪を演出。
コーヒーから出るハートマークの湯気がかわいらしく、またほっとできる印象。

ロゴマーク作成者　木下美里さん（札幌市立大学　デザイン学部）

資料 3. アンケート結果

○実施カフェ
北大祭カフェ、第2回SYC for 3.11カフェ、オープンキャンパスカフェ、北海道マラソン応援カフェ、エルプラまつりカフェ、Photo café、サステナカフェ、クラークシアターカフェ、銀杏並木カフェ、第3回SYC for 3.11カフェ、かまくらカフェ
○回収部数355
○回収率9.5%



お客さまからの声

○カフェがあるとは知らずに来ましたが、（カフェが）あってとても良かったです。また、来年もぜひ来たいと思います。（銀杏並木カフェ・40代・女性）
○紅葉の自然の中で頂くコーヒーの味最高！（銀杏並木カフェ・70代・女性）
○飲み物おいしかったです。大学生の方と学部についてや学生生活についてのお話ができてとても楽しかったです。（オープンキャンパスカフェ・不明）
○これからもずっとつづけて下さい！　とてもいい場所です！！（北大祭カフェ・不明・女性）
○緑があってテラスみたいで良いと思います。（カフェは）初めてですが、気に入りました！（北大祭カフェ・40代・女性）

資料 4. 活動の様子

「北大祭カフェ」

「北海道マラソン応援カフェ」

「エルプラまつりカフェ」

「photo café　～フォトでつなぐココロ～」

「サステナカフェ」

「銀杏並木カフェ」

「第3回SYCカフェ」

「かまくらカフェ」

よさこいナイトフィーバー2012

代表／山内　優祐　　農学部　　農業経済学科　　3年

■実施の内容

北大祭の1日目に、工学部横イベントスペースにてよさこいのイベントを開催。出演サークルは北大のよさこいサークル「YOSAKOIソーラン北海道大学 “縁”」と「祭人」。

当イベントの趣旨は「言葉の壁を超え、踊りを通じて留学生と交流する」というものであったので、国際本部での声かけ、ビラ配り、フェイスブックによる宣伝と広報活動に重点を置いた。

■実施時期

2012年6月11日

■実施の評価

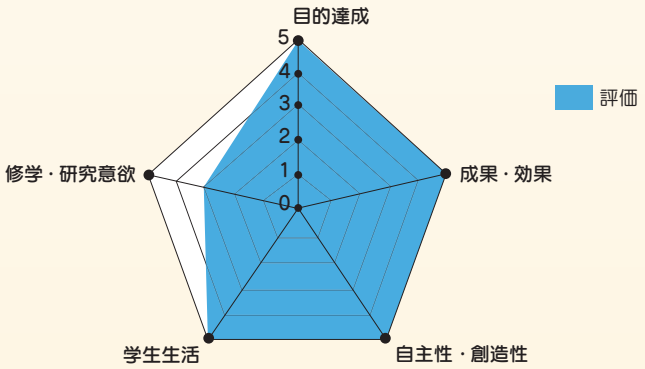
当日は全体で300人ほどの観客の内、50名程度の留学生の姿を確認できた。

元気プロジェクトで支援して頂いた鳴子も、留学生も含めた来場者が一出演者として会場を盛り上げるための要素として役立っていたと感じている。

■構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
中田　紘平	農学部	農業経済学科	3
丸山　泰平	農学部	農業経済学科	2
竹内　桂介	医学部	保健学科	3

■実施評価



北大生による「生物ロボットコンテスト」への参加

代表／峯　健太　　理学部　　化学科　　2年

実施の内容

目標は大きく三つ存在します。

一つ目はiGEM（international Genetically Engineered Machine competition）、通称「国際生物ロボットコンテスト」において優秀な成績を収めることです。

二つ目は国際大会という場で他国の同世代の学部生と、英語による特定の科学分野（合成生物学）を共通の話題として交流を行うことで、国際的なコミュニケーション能力を学部生という早い段階で身に付けることです。

三つ目は自主的な実験を通して高度な実験技術を早期に身に付け、かつ座学では得られない実際の経験に基づいた学力の定着です。

ただし、一つ目の目標達成、すなわち優秀な成績を収めるということは、他の二つの目標を達成してから初めて追従するものです。これら三つの目標達成のために、私たちは自分たちの理想にあった生物ロボットを精確に理論立てて作成すること、そして英語による科学的な情報伝達力・プレゼンテーション能力を磨く必要がありました。

まず、どのような生物ロボットを作成するか、すなわちどのようなプロジェクトを立案するかを模索しました。2月から3月にかけて、新人教育の一環として基礎実験講習や論文の読み方の講習会等を行った後、今年度のプロジェクトを新規、古参メンバー全員で出し合いました。議論の末、最終的に私たちは今年度のプロジェクト内容として「生分解可能なバイオプラスチックで目的産物を囲い込み、遠心分離をせず沪過により容易に目的産物を回収することができるBio-Capsule生産ロボット」を立案し、それを実現しうる生物ロボットを、各デバイス（遺伝子からなるパーツ）を組み立てることで実現することを目標としました。目標が決まり次第、授業や論文を通して培った知識を駆使してプロジェクトの理論的な洗練、予備実験を通した実験計画の展望の予測、どれだけ自分たちの理想としている生物ロボットと差があるかなどの分析、そしてプロジェクト全体の軌道補正、生物ロボットの性能向上を行いました。これらの行為自体は、生物ロボットを扱っているという点で違いはありますが、制限酵素を扱うことや、大腸菌株を選択して形質転換するなど、分子生物学の分野の研究を行うことと変わりはありません。実験は期限である夏休み終盤まで、連日連夜行いました。

実験期間が終了したのちは、英文作成や英語によるプレゼンテーション能力および情報伝達能力を、経験豊富なアドバイザー（大学院生）やインストラクターからの指摘を受けて、なおかつ互いに議論することで磨き、本番へ向けての準備を行いました。

そしてAsia大会の開催地である香港科技大学へ赴き、英語による発表や質疑応答に対応し、ポスターセッションによる発表も行いました。さらに大会終了後も、現地の大学生と食事を共にするなどの交流を行いました。

以上の活動を通した私たちのコンテストの成果として、私たちはAsia大会に参加した全50チーム内で上位20%に位置する金メダルを受賞することができました。これは、iGEM_HokkaidoU（私たちのチーム名）発足以来3年間で初の快挙となり、この事実は、チームとして年々着実に進化して、進歩が得られていることを示します。

さらに、ただ単に賞が与えられただけでなく、審査員団からは活動内容のフィードバックのために各評価基準に応じた評価点数が公表されたので、私たちはこれを参考に今年度の活動内容について反省を行いました。このように、私たちの活動には客観的な評価基準が存在しており、活動のフィードバックが容易であることが特徴の一つとしてあります。

そして、一段落ついた冬には各スポンサーへの報告会を行いました。今年度は市民の方々との交流の一環として、紀伊国屋本店においてインストラクターである山崎健一先生（准教授・地球環境）の著書の出版記念講演会に同行して、生物ロボコン報告会もその場で併行させていただきました。同時に山崎先生とともに合成生物学について、その有用性や将来への展望についての講演も行わせていただきました。更なる詳細につきましては、山崎先生の作成した報告書を添付しますので、そちらも参照してください。

2月現在では新人教育の一環としてBoot Campを企画し、新たなメンバーの育成に努めています。加えて、すでに来年度のプロジェクトに向けた活動も開始しており、頻繁にミーティングを開催してプロジェクト内容や実験方法などについて議論を行っています。

実施時期

年間の活動記録の概要をここに記入します。

2～3月にかけては、新しくチームに加わったメンバー向けの新人講習会（Boot Camp）を実施し、メンバー全員の知識の底上げを行いました

4～5月にかけて、本年度のプロジェクト「Bio-Capsule」の立案をいたしました。

その後夏休みまでにプロジェクトを練り上げ、夏休み中に実験を行いました。

夏休みの終盤には実験の結果をポスター・Wiki（論文の代用としてWebサイト上に書く物）・プレゼンテーションの形でまとめ、10月には香港で行われたAsia大会へ出場しました。

Asia大会終了後は反省会や他のスポンサーへの報告会等を行い、12月ごろからは、すでに来年度のプロジェクトの立案とそのための予備実

構成員

氏名	学部・研究科等名	学年	担当する役割
池端　亮介	薬学部薬科学科	2	チームリーダー
洲鎌　なつ	理学部生物科学科	2	サブリーダー・Wet Labリーダー
伊藤　健史	医学部医学科	2	Dry Labリーダー
室井　宏仁	理学部生物科学科	2	Human Practiceリーダー
岡村　　遥	理学部生物科学科	2	広報
小原　薬子	理学部生物科学科	2	広報
川畑　亜美	理学部生物科学科	2	広報
新田　幸子	文学部人文科学科	2	書記
梅内　紫芳	総合教育部理系総合	1	
松村　直也	医学部医学科	1	
竹内　一朗	理学部化学科	2	
小林　鷹生	理学部生物科学科	4	
松本　悠一	理学部生物科学科	4	
ヴァナガス ラォーリナス	環境科学院	1	
高橋　一樹	生命科学院	1	
牧野　俊一	医学部医学科	6	

香港科技大学

発表

ポスターセッション

審査員団

発表練習

ポスターセッション

験等を進めております。

2月現在では、また新たにメンバーに加わったフレッシュマン向けの実験講習会とプレゼンテーション講習を行っています。

■実施の評価

まずは、「当初の目的を達成できた」かどうかについて記述します。この場合の当初の目的とは、以下の二つの目的を指すものと考えます。

一つ目は、研究活動を学部生の段階で経験、その技術を早期に獲得し、iGEMという世界的な合成生物学の大会を通じて、その大会で優秀な成績を収めることができるだけの学習・研究能力を持つ学生、つまり「自分で研究内容を考えて、自分で研究結果を出して発表することができる自主性に富んだ学生」を、コンテストというゲーム（試合）の形で意欲を増長させて育成することです。

二つ目は、生物ロボコンを通して培った遺伝子組み換えに関する知識を用いて、北海道の市民の方々との交流を通し、合成生物学や遺伝子組み換えという、黎明期にある比較的新しい学問分野についてその進展を共に考え合うことが目的です。

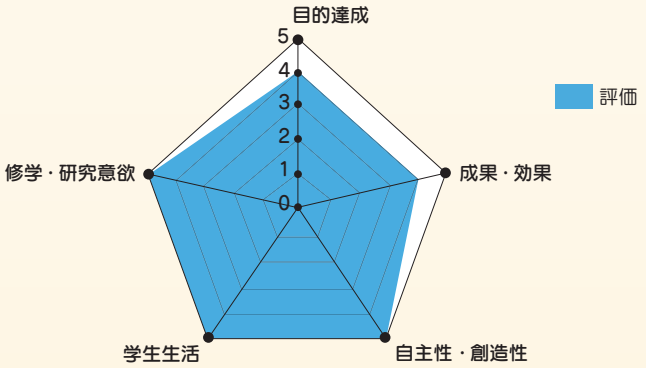
一つ目の目的については、メンバー各位がこの一年間研究活動に勤しみ、活動を通して研究の技術やノウハウを、少なくとも平均的な学部生以上に身に付けることができたと感じております。金メダルという、Asia大会に参加した各大学チームのうち、上位20%に相当する成績を収めたチームのみ獲得することができる賞を得たことが、何よりもその証拠たり得るでしょう。さらに、自分たちの考えたテーマで研究を行うことができたことは、自らの意欲に基づいて活動したためその定着率も良く、創意工夫の余地があることにより学生の自主的な思考を促すことができたため、将来の研究生活に対して大きな影響を与えることになったと感じております。

さらにその活動内容はインストラクターである山崎先生を通じて、フレッシュマンの授業にて紹介を行い、また、その授業に参加していたフレッシュマンには分け隔てなく門戸を開放し、どなたでも私たちの活動に参加できるよう促し、事実数名のフレッシュマンが今年度末に新たなメンバーとして加わりました。これらを通じて、フレッシュマンに対する学習意欲の向上の波及的効果が得られたと考えられます。そのほか、理学部生物学科向けやスポンサー向けの報告会も実施いたしましたように、実際に活動したメンバー以外の人々の学習意欲向上についても貢献することができたと自負しております。

ただし残念なのは、緊迫した実験期間において、二つ目の目的、つまり市民の方々と十分な交流を行うことに関しては、あまり時間を取ることができなかったということです。今年度に市民の方々と交流したのは、ほとんど紀伊国屋にて行われた活動報告会、及び各スポンサーへの活動報告会のみに留まりました。来年度はより市民の方々と交流が行えるように、大学祭等でiGEMのブースを設けるなどの対策をチームミーティング内で立案しております。大学祭ならば、北海道大学を受験する高校生や、より若い小学生・中学生に対しても交流を行うことができますので、私たちの活動を波及し、新しいことに対する意欲のはなはだしい10代の人々に刺激を与えるには良い機会であると考えております。

さらに、優秀な成績を収めることができたかどうかについては、金メダルを獲得できたものの、MITにて行われるiGEM本戦（Championship）に出場できませんでした。Champion shipに出場することはゲー

■実施評価



ムに参加するチームとしての目標の一つでしたが、これに参加できなかった事はとても悔やまれることであり、来年度こそはiGEM本戦に出場できるように努力して参りたいと思います。

したがって、これらのことを考慮すると、参加した学生はスキルアップすることができ、さらに他の学生の学習意欲を刺激することが出来たが、市民との交流が薄いという理由により、4と評価させていただきました。

以下の項目については、上記した「当初の目的を達成できたか」ということに関して述べたことをふまえて、各事柄についてより詳細に述べていきます。

「期待される成果·効果をあげられた」かどうかについて記述しますと、これに関しては「当初の目的を達成できたか」ということについてと同様に、参加した学生の学習意欲と研究能力の発達、市民との交流を通じた科学の在り方についての議論、そしてフレッシュマンを始めとした他の学生への波及的な学習意欲の向上を成果・効果と設定しておりましたので、ほとんど一つ目の項目と同様と判断して4と評価させていただきました。

「自主性・創造性を発揮できる機会となった」かどうかについては、iGEMは学生の自主的な研究活動を促す好機ですので、自分たちでプロジェクトを考案して実験計画を立て、また授業の拡張として自分たちの組み立てる生物ロボットについて理論的に設計することができる良い機会でした。そのため、自主性や創造性を発揮できる機会かどうかは、言わずもがな最良の機会であると考えています。

加えて、私たちのチームでは、実験以外の活動にも積極的に参加しました。生物ロボコンで主に行われるのは、遺伝子組み換えを始めとした分子生物学を中心としたウェットな実験です。しかし、企画書にもあらかじめ記述しましたように、生物ロボコン内ではウェットな実験を行うチーム内Labである「Wet Lab」の他にも、in silicoな活動を行う「Dry Lab」、市民や他のiGEM参加者との交流プログラムである「Human Practice」が存在します。今年度の私たちのDry LabおよびHuman Practiceの活動内容は、それぞれの活動を一括して、全世界のiGEM参加者を対象として「iGEMで用いられているパーツのレビュー・サイトを立ち上げることで、パーツの質の向上を目指す」活動を行いました。これは創造性あふれる企画であり、参加した学生の得意分野（情報工学分野）を生かした自主的な設計により立ち上げを実現することができました。

したがって、各Labに関して計画を立ち上げ、そして実際に自主的に計画を実践できたことから、この項目を5と評価させていただきました。

「この経験が今後の学生生活に役立つと考える」かについて記述します。学生生活の側面のうち学業について考えるならば、このiGEMに参加することは前述しました通り学生が座学で得た知識の実践を行うことができるということで、学問の定着を謀るうえでとても役立つものだと考えております。さらに学業の面だけではなく、実験計画をすることを通してプランニングやマネジメント力を鍛える場の提供としても、生物ロボコンへの参加は有意義であったと考えております。したがって、5と評価させていただきました。

「修学及び研究意欲を促進できた」かどうかについては、これまでの項目と重複するところがございますので簡潔に記述しますが、学業の延長として自主的に研究活動を行うことができたという理由から5と評価させていただきました。

■その他（希望・反省等）

私たちの活動は、コンテストに参加するという性質上、他の元気プロジェクト採択事業と比べて、参加した学生の成長がプロジェクト実行成果の多くを占め、北大の周囲の方々、すなわち札幌市民の方々や在学生、北大へお越しになられた方々への還元が少ないものと認識しております。特に今年度は、実験が立て込むなどのいくつかの事情により、札幌市民の方々との交流機会は少数に留まりました。昨年度は札幌駅の地下歩行空間でBIO ARTという、生物学とアートの融合をテーマとした展示物を通して、市民の方々が気軽に生物学に触れ合う機会を設け、同時に遺伝子組み換えに関するアンケートを実施することで、市民の方々に対して遺伝子組み換えを始めとした先端科学に関する意識調査を行うことができました。それと比べても、市民との交流の場が昨年度の私たちの活動と比べて少ないことは、事実として真摯に受け止めております。

実施の評価の項目においても記述しましたが、このような私たちのプロジェクトに関する現状に対して、対策をいくつか考案いたしました。他の大学のiGEMチームの活動内容を参考例として述べますと、他のチームはHuman Practice（市民と参加者との交流を通して、合成生物学の流布と認識を高め、そして遺伝子組み換えについて議論したことを評価するiGEM内のプログラム）として、現地の高校へ向かい遺伝子組み換えについて教育するチームもあり、近年では大半のチームが、高校で交流を行うことをHuman practiceとして行っています。私たちは今年度のHuman Practiceとして、生物ロボコンに用いられるパーツの性能評価の向上のための交流サイトを立ち上げることに努めましたが、来年度は市民の方々への交流に重点を置き、高校へ実際に赴くことも視野に入れつつ、さらには大学祭等で専用のブースを設けることを現在思索しています。他にも、北海道大学総合博物館では、定期的に市民セミナーという形で、各研究分野の方々が先端の科学について市民の方々に対してセミナーを開催していると存じております。このような場をお借りして私たちの活動報告会を実施するなど、還元方法にはいくつかの対策案が考えられます。

生物ロボットコンテストへの参加というプロジェクトは、やはりコンテストという性質上、参加した学生本人たちが最も成長するようになってしまいます。それだけでも十分望ましいとは思いますが、やはり北大元気プロジェクトと銘打たれた基金でございますので、北大および市民の方々へ還元は必須と考えられます。

私たちのプロジェクトは、この国際的な生物ロボットコンテストへの参加と活躍によって、北大の名を世界に広める役割、および私たちの活動の流布を通して、他の学生の学習意欲を波及的に増強する役割を担っていると考えてはおりますが、対して直接的な市民の方々への還元が私たちのプロジェクトには足りないものだと思います。そのため、来年度へ向けては市民の方々との交流の場を増やすことに加えて、やはりコンテストでございますので、より良い成績を収めることを課題としていきたいと思います。

最後に、今年度活発に活動することができたのは、一重に北大元気プロジェクトからのご協力の賜物です。切に感謝申し上げます。

北海道大学卒業パーティー2013

代表／西川　亮輔　　法学部　　法学課程　　4年

■実施の内容

卒業生と卒業生同士の絆を深めること、また卒業生に新たな交流の場を提供し、北海道大学の良き思い出の1つにしてもらうことを目的として歓談、立食パーティーを開催します。

式次第としては

・同窓会長からのご挨拶（連合同窓会・東京同窓会・関西同窓会）
・歓談、立食
・全員参加型プログラム

を予定しています。

■実施時期

3月20日

■実施の評価

現在準備中です。

私たちは、パーティーを通して多くの北大生が集う中で、参加者1人1人が北大生として残した自身の足跡を振り返り、社会に出てからも北大の理念であるフロンティア精神を常に持ち続ける事が出来ると考えられます。

また、同窓会、あるいは卒業生同士の結びつきを強め、北海道大学卒業生の社会でのより良い連携が行えるとも考えております。さらに、主賓は学士課程、修士課程、博士課程の修了者ですが、会に参加する学部3年生や、修士1年生等、送る側の学生にとっても社会で活躍する北海道大学OB・OGやこれから社会へ向かう卒業生とふれあうことで学ぶことも多いと思われます。

■構成員

氏名	学部･研究科名	学科･専攻名	学年
加藤　央祐	工学部	応用理工学科	2
飯田いづみ	理学部	数学科	4

■その他（希望・反省等）

イベントが実施報告書提出時期以降となるため、当日計画及び期待される効果を記載するにとどまること、ご容赦願います。

※写真は前年度のものです。

北大元気プロジェクト2012は、原則として平成25年2月までに活動を終了しますが、当プロジェクトは3月に開催するため、現在活動中です。本報告書には、イベント当日の計画等を報告しました。

「元気プロジェクト2012」活動報告会を開催

標記活動報告会を、前期日程を平成24年12月20日(木) 13時30分～15時50分に、後期日程を平成25年2月20日(水) 10時00～13時00分に高等教育推進機構大会議室において実施しました。

採択された26団体が、実際にどのような活動を行ったかを広く知ってもらうために各団体からパワーポイントによる8分の発表、2分の質疑応答が行われました。

各プロジェクト構成員同士の活発な質疑応答が行われ、次年度申請予定の方や教職員の姿も見られました。

来年度は平成25年12月および平成26年2月に報告会を開催する予定ですので、13回目を迎える「北大元気プロジェクト」に採択されて充実した学生生活を送っている皆さんの姿をぜひ見に来てください。

辻委員長からの挨拶

前期日程

▲前期日程・質疑応答

▲前期日程・発表

▲前期日程・発表2

後期日程

▲後期日程・電子会議システムでの発表

▲後期日程・発表

▲後期日程・発表2

北大元気プロジェクト2013 募集中！

北大を元気に！

実現したいアイディアはありますか？

「北大元気プロジェクト」（通称「元プロ」）では、皆さんの自主性、創造性を思う存分発揮できる機会を提供し、大学生活が充実したものになるように、アイディアの実現を応援しています。

▲僕らの歩行祭～夜のピクニック～

▲北大金葉祭

大学からの援助が受けられます

・元プロに採択されると、プロジェクトの実現に必要な物品の援助が受けられます。（上限50万円）

・公認団体も応募できます。
※本来のサークル活動を目的とするものは対象外

プロジェクトのテーマは自由！

・キャンパスライフを快適にするアイディア

・日頃の疑問を解き明かす研究
※卒業・修了研究に関するものは対象外

・地域の人たちと一緒に行う地域活動

応募締切

●第1回採択分　平成25年4月26日（金）　17：00
●第2回採択分　平成25年6月28日（金）　17：00

詳しい応募要件、応募方法、援助内容等については、「北大元気プロジェクト募集要項」をご確認ください。

お問い合せ

学務部学生支援課　学生支援企画担当（高等教育推進機構②番窓口）
電話011-706-7454　E-Mail gakusei@academic.hokudai.ac.jp

北大元気プロジェクト2013 募集要項

1. **目的**
学生の持っている自主性、創造性を思う存分発揮できる機会を提供し、学生の修学及び研究意欲を促進することによって、充実した学生生活を送れるようにすること、及び、北海道大学全体を元気にすることを目的とします。

2. **応募要件**
（1）本学の学部学生・大学院生で、個人またはグループにより、学生自身が企画・運営・実施するもので平成26年2月末までに終了するプロジェクトであること。
（2）本学の全学・学部の公認学生団体は応募することはできます。ただし、本来のサークル活動支援を目的としたプロジェクトは、応募することはできません。

3. **援助内容**
プロジェクト1件あたり、上限50万円までの必要物品を援助します。
（1）援助は物品による現物支給で行います。大学を経由せずに購入した物品の代金は、支給できませんので注意してください。
（2）備品（デジタルカメラ等）については、プロジェクト終了後に返却してもらいます。
（3）物品によっては、支給できないものがあります（飲食物、現金支払いのみの商品など）。
（4）交通費は、必要と認められる場合に限って、JR券等を現物支給します。

4. **採択件数**
年2回の採択で25件程度（予定）

5. **応募方法**
「プロジェクト企画書」に必要事項を記入の上、学務部学生支援課学生支援企画担当（高等教育推進機構②番窓口）に提出してください。また、プロジェクトに関する参考資料がある場合には、企画書に添付してください。なお、「プロジェクト企画書」は、上記窓口若しくは、各学部の事務室で配付しています。

6. **応募期日**
1回目応募締切　平成25年4月26日（金）17：00
2回目応募締切　平成25年6月28日（金）17：00

7. **選考方法**
「北大元気プロジェクト選考委員会」で、書類審査・面接（プレゼンテーション）のうえ決定します。面接日時は、応募締切後にプロジェクト代表者へ個別にお知らせします。
なお、昨年から引き続いて実施を予定するプロジェクトは「継続プロジェクト」として、前回、提出された報告書を含めて、「新たなプロジェクト」とは別に、厳密に審査します。

8. **選考結果の発表**
面接（プレゼンテーション）終了後、およそ一週間後（予定）に結果を掲示等で公表します。
また、採択されたプロジェクトの代表には個別にお知らせします。

9. **実施報告書・活動報告会**
プロジェクト終了後、実施報告書を作成するとともに活動報告会（平成25年12月および平成26年2月を予定）で発表し、活動内容・成果等を報告してもらいます。

10. **昨年度のプロジェクト採択状況**
2012年は45件の応募のうち、26件のプロジェクトが採択されました。（別紙採択一覧参照）

11. **応募書類提出先、お問い合せ**
学務部学生支援課　学生支援企画担当
電話：011-706-7454　メール：gakusei@academic.hokudai.ac.jp

北海道大学 学務部 学生支援課 学生支援企画担当
〒060-0817　札幌市北区北17条西8丁目
TEL 011-706-7454